0025724000

0025724-000

７５０－１００

体験人間学

牧野元次郎・著

今日の問題社

昭１３

ADF

750
100
001

26.1.29

體驗人間學

牧野元次郎著

今日の問題社發行

著者の近影と自署

750
100

はしがき

本書は、私が過去いろ〳〵な場合、事に當り、時に應じて、種々感じた事、例へば、斯うすべきが本當であるとか、斯ういふやり方は、間違つて居るとか、人の行くべき道は、これでなければならぬとか、己れを完成する道は斯う、事業成功の道は斯くあらねばならぬといつたやうな事を、內輪の者に語つたものでありますから、謂はゞ、私の體驗記錄ともいふべきものであります。

私は、今自分の歩いて來た道を振返つて見て、しみ〴〵と體驗の尊きを感じさせられます。洵に、人生は複雜多岐でありまして、理窟通りに行くものではありません。單なる理窟は、机上の空論であつて、何等價値のないものであります。

ですから人生を學ぶといふことは、單に修養書を讀むといふことだけでなく、直接事に

打つかつて、體で經驗し、心で修練することであります。而して、其の體驗が深まるにつれ、物の道理への認識も深められ、人生に對する眼も開けて、自然と、其所に進歩發展の道が生れて來るのであります。

よく『成功は努力の階段を一歩々々上るやうなものだ』と言はれてゐます。其の階段の一段々々は、即ち、體驗の連續でありまして、今日の體驗を生かして、明日の體驗に資して行く……さうして、一段々々と體驗の階段を上り詰めると、其所に『成功』が待つて居るのであります。人格の完成も、事業の繁榮も、すべて、此の體驗の階段を、一歩々々上ることによつて達成し得られるのであります。

孔子の所謂『四十にして惑はず』といふ境地も、一年々々の人生的體驗を經て、始めて到達し得られるのでありまして、其の一年々々の體驗の仕方が悪いと、階段の途中から轉落するやうな事になります。轉落しない迄も、進歩遲々として、四十にして惑はずどころか、日暮れて途遠しの憂目を見るやうな事になります。要は、如何に體驗を生かして行く

かといふことで、それには、先づ全身全靈をこめて事に當るといふことが、最も大切であります。

今や、時局は眞に重大でありまして、我々國民は、益々力強い信念をもつて、國難打開に努力邁進、以て奉公の誠を盡さなければなりませぬ。この秋に當り、本書が幾分なりとも世間の人々の御參考になれば、望外の仕合せであります。

昭和十三年五月

著者識す

目次

我が處世上の信念……一
人生の航海……三
運命にさからふな……六
人間の根本は何か……一〇
どうしたら己れを統一出來るか……一五
今日を正しく生きよ……一九
日蓮上人の信念……二一
私の修養上の原則……二五

事業と信念……二九
人を教導する事業……三一
國の富を增す事業……三三
正しい道を行く……三六
愉快にやる仕事は必ず成功する……三八
正義が第一……四一
驚くべき信念の力……四五
自己暗示と念力……四七
念力の驚くべき實驗……四八
惡いことは出來ぬ……五三

人に勝つ……五七
精神力の偉大さ……五九
必ず勝つと信ずる力……六五
人生悲觀は禁物……六九
樂天生活をなせ……七一
人生食ひはぐりはない……七三
正しく働けば必ず食へる……七六
三ッ割生活法とは何か……七九
人生と生活……八五

人間生活と食物……八七
すべては天の攝理……九一
食ひ方には方法がある……九四
貯金の必要……一〇一

戰爭と金の力……一〇三

國力と金力……一〇五
非常時に備へる用意……一〇八
どうすれば金が出來るか……一一〇
金を作るコツ……一一四

私の事業哲學……一一九

九つの苦心……一二一
事業を單純化す……一二三
合理的に經營する……一二四
一事業に專念する……一二九
其他のこと……一三〇

私の銀行經營に於ける信念……一三三

金の力と貯金の必要……一三五
國家國民を金持にする仕事……一三七
大衆のための銀行……一三九
何事も因果應報……一四三
人の心と神……一四八

罪業の借金は早く返せ……一五〇
悔ひ悛めよ……一五七
神の心に從へ……一六一
天の與へた道具を活用せよ……一六二

中流階級と金融の道……一六五

中流階級救濟のため……一六七
勞資の對立はいけない……一七三
中流階級の金融機關……一八〇
サラリーマンのために……一八六
一つの金融組合……一八七

金の性質と金儲け法……一八九

金とは何か……一九一
金の勢力……一九三
金に執着すべからず……一九四
經濟的に散金すべし……一九七
惡惠的の散金……一九八
金儲けにも巧拙あり……一九八
金儲けの秘訣……二〇〇
金儲けの心得……二一五

貯金の必要と貯金法……二二三

何故貯金が必要か……二五
貯金の幸福……二七
どうすれば貯金が出來るか……二三
眞の生活態度とは……二七
貯金に時なし……二一
貯金に必要な三條件……二三
最後は實行……二六

我が處世上の信念

人生の航海

われ〳〵が、何か一つの事業をやつて行く上においては、いろ〳〵な方面から、非難中傷を受けるものであります。

いかなる穏かの日でも、大海に出ると、必らず、相當の波は常にあります。事業といふものは、その波の間を、ズツと進んで行くべきものでありますから、いかなる時でも、いろ〳〵の方面で、多少の波が二六時中あります。

さういふ波のあることが普通で、波がなかつたならば、實に、不思議です。波があるのが常態であります。

さういう波があつても、動かされないやうに、ドツシリとして、所謂、泰山の如き態度で、その海を進んで行かなければなりません。

少し波があつても、その波のために、船が動き出すやうなことでは、それは、造り方が悪いか、操縦の仕方が悪いか、乘り込んでゐるものゝ誠意が足りないか、力が足りないかといふことになります。

だから、いくら、平らかな海でありましても、常に、波のあるといふことを、覺悟しなければなりません。

また、今日は天氣がよいといふても、雨の日も、風の日も、中には暴風雨の日もある、さういふことがあつて、船は隨分動かされることが、あるかも知れません。

しかしながら、海に出てをれば、さういふことに遭遇するのが、當然で、さういふ時には、たゞ一生懸命、その船を守るといふことに、お互が努力さへすれば、必らず、安全に彼岸に達し得るものであります。

よしんば、それが、如何なる天候の災害を受けて沈沒しても、また浮び上るやうな時代もあります。

それを、少し風が吹いて、波が立つといふと、ソラ大變だといふので、卑怯未練にも、その船をすて、逃げ去る者があつたなゝば、さういふ人は、この活社會に到底生活の出來ない人であります。

如何なる波が立たふと、それは當然であるとして、觀念して、平然と、それに處して行かなければならぬ、一致協力して、船を守つて行かなければなりません。

その覺悟を、もつて行くならば、如何なる風が吹かうが、波が立たうが、平氣の平左衛門で居られる筈であります。

まして、お互ひの身體といふものは、お互ひ自身が、勝手に、こしらへて生きてゐるものではありません。

生きようと思つて、生れて居るのではありません。みな、さういふ運命をもつて、こゝに存在して居るのであります。

所謂、お互の運命は、過去前世における因縁の結果として、チヤンときまつて居る、沈

沒すべき船に乗り込むのも、また幸に彼岸に達するのも、要するに、過去のお互の所業によつて、チャンと定められて居るものであります。

騒いだ所で、騒いたところで、のがれるものではない、所謂、宿命といふものは、容易に脱し得るものではありません。

運命にさからふな

たとへば、生れながらにして、五尺の身體しかない人があり、或は六尺の大きな人もある、これらの如きも、矢張り、前世、もしくは過去の原因から、定められた運命であります。

五尺の身體が、低いからというて、いくら悲しんで見たところで、六尺にはなりません。また、六尺に生れた人は、いくら小さくならうといたしましても、なれるものではあ

りません。

また、若くても頭の禿げた人が、毛を生やしたいと思つても、チャンと、さういふ運命に定まつてゐる、頭が禿げたからというて、その禿を止めることは出來ません。

また、禿げたいからというて、禿げられるものではない、また、髯が欲しいからというて、髯を生やすことは出來ない、今日の如く、醫術が進歩してゐても、未だに髯の生えない藥といふものはないやうであります。さういふ藥があれば髮床へ行かないで濟むだらうと思ひますが、いまだに發明されない、即ち、人力の及ぶところではありません。

また、髯のある人と同じやうに、髯が欲しいと思つたつて、生えない人は生えない、女は髯がないやうに出來てゐる、これらも、チャンと、さういふやうに、神様が、こしらへて居るのであります。

ところが、さういふのは、人が怪しまない。例へば、太陽は、いつも、東から出て西へ入る。オギヤアと生れた時から、見て居りますから、何でもないやうに、思つて居ります

が、勝手に昇つて來るのではありません。

東の方から、昇るやうにするものがあつて、初めて、昇つて來るものであるといふことを、想像しなければなりません。推測しなければなりません。さういふ力のあるものが、太陽をして、東から昇らせるといふことを考へて見なければなりません。

また、千萬年も昔から、アヽいふ非常な熱をもつたものが、光りを放つて天空に懸つてゐるといふことは、實に、また不思議といはなければなりません。しかるに、生れながらにして、見てをりますから、人は不思議と思つて居りません。

さういふやうに、總てのものが、きまつて居る、人間の一生も定らぬやうで、定つて居るものであります。しかし、また、それは過去の因緣によつて、大體がきまつて居つて、今日、日々の働きによつて、變化を來すといふことになります。

例へば、過去の所業が、惡かつたために、今生に、いろ〳〵の災禍が、出來たりしますが、今日の所業が、正しければ、差引勘定で、過去に犯した罪が、こゝに現はれて來ないかも知れぬ、みな罪を消してしまつて、好い結果だけが現はれて來るかも知れません。

いろ〳〵複雜になつて居りますので、一樣にはいへませんが、とにかく、すべての運命を支配して居られる神樣が、宇宙に存在してゐるといふことを考へるならば、如何なる危險災難が、こゝに湧いて來ても、決して驚くには足らぬことであります。

元來、神樣が、お互ひを支配して居られる。お互ひの行動は、大小すべて神樣に支配されて居るのである。支配されて居るにもかゝはらず、神樣が命じた道、例へば、この途をとれといふのに、他の途をとつて、それがために、禍ひが起つてくるのは、確かに自分が惡いのであります。

如何にして、その罪をつぐなふべきかといふと、たゞ〳〵、その日〳〵、最善の途を盡すといふ一事であります。

人間の根本は何か

一體、この人間は、實に、不思議なもので、段々と尋ねて見たならば、人間をつくりなしてゐる、その中心點に存在する心と申しますか、魂と申しますか、それと、宇宙の主宰者、これを神と申しますか、さういふものとは、確かに、連絡があります。

そこで、昔から、神道では宇宙の大主宰者は、天御中主大神といふことをいうてをります。その天御中主大神と人間とは、どういふ關係があるかといふと、人間の身體の中には直靈といふものがあるさうであります。この直靈が根本であるさうであります。

その直靈は、その神樣の分派である、神樣の派遣した分子であるさうであります。その直靈なるものが中心となつて、いろ〳〵の魂が集まり集まつて、一つの人間を作つてゐるのであります。

これを例へば、神道の方の言葉でいひますと、和魂、幸魂、荒魂などといふものが集つて、人間となつて居ります。それを統一して居りますのが、直靈といふものである。直靈は、即ち、神樣と親子の關係にあるべきもので、この直靈は、人間が死んだ時には、神樣のもとに歸着するものださうであります。

さういふやうに、だん〳〵研究の結果、神即ち人といふやうな言葉が出て參りました。人間は卑しいものである、と思ひますと、サツパリ價値がなくなつてしまふが、しかしながら、この宇宙の廣大無邊を主宰してゐる神樣の一分子が、人間となつて居るといふことになると、はじめて價値がある。

たゞに、人間ばかりではない、すべての動物、すべての植物、すべてのものに、直靈なるものが宿つて居るのであります。

さうして、その下に屬すべきいろ〳〵の魂がある、即ち、八千魂といふほどに、いろ〳〵の受持をしてゐる部分々々の魂があります。

例へば、身體にしても、さういふ肉體全部を荒魂と申します。荒魂の中にも、いろ〳〵の受持がある。そのいろ〳〵の魂を統一し、支配してゐるのが、直靈であります。

例へば、私の銀行で申しますと、私が、頭取として全般を支配して居り、その下に支店長があつて、それ〴〵の店を支配して居る。また、その下に何々係といふのがあつて、方々分擔をして支配して居るといふやうなもので、神様から直接關係の直靈といふものが、人間に宿つて、その直靈の下に和魂、荒魂などといふ、いろ〳〵の魂が、それ〴〵仕事を分擔して居ります。

そこで、その分擔して居る魂が、勝手氣儘な考へを起したり、所謂、勝手な行動をしたがつたりすると、即ち、病氣といふことになります。

直靈といふ一つの神様、神様の分身が、こゝに宿つて居つて、その支配を受けて、統一されてゐる時には、身體は壯健であります。その身體全部が、統一されて居る時には、火の中へ入つても、燒けない、水の中へ入つても、溺れないといふ境涯に達します。

統一してゐないと、形だけは成つて居つても、その部分々々が勝手な働きをして、例へば、胃の魂は勝手に、何でも物を食はふとする。ところが、直靈といふ主宰者から、さうたくさん食べてはならぬぞ、といふ命令が下つたにも拘はらず、胃の方では勝手に物を食ふといふやうなことをする。また、すべての方面が、矢張り、勝手に自分の慾をみたすといふやうな、勝手な行動をする傾きがある。さういふやうなことでありますと、即ち、統一されて居ないと、全身として、つまり、立派な働きは出來ないといふことになります。たとへば、一方は、こちらへ歩いて行かうとするのに、こちらでは、彼方へ行かうとする。中には歩きたくないといふやうな部分が多數あると、人間の體なら病氣になつて來る。即ち、直靈の統一が、つかないから、立派な働きが出來ぬことになつて來ます。

しかるに、この何十何萬とある魂が統一されて、一方面に向つて、突進したならば、その勢力は、非常なものであります。ちやうど、戰爭の時に、突貫といつて、集つて進んで行く、あの勢力は、到底、どんなものでも防ぐことが出來ない力を持つて居るさうであ

りますが、それと同じやうなものであります。まづ身體全部を統一して行かなければなりません。

煙草をのみたいといふ一つの魂がある。それを直靈が、のんではいかぬといつて、のませないやうにするまでに、力強く、直靈の光りを發揮させなければなりません。

それを、力が弱いといふと、煙草をのみたいといふ魂が勝つてしまふ。酒をのみたいといふ魂が遠慮なく飲む、サアさうなると、すべての調子を失なつてしまつて、病氣になる。また、さういふやうな、つまり異分子が身體に充滿して居つては、何をやつても巧く行かない、そこで、立派な活動をして行かうとするには、まづ第一に、日々お互ひの身體を統一して行くことを考へなければなりません。

また統一をする力は確かにある。所謂、すべての宇宙、廣大無邊なる宇宙を主宰してゐるところの力強い神樣の分子が、お互ひの身體に宿つてゐる。その分子が直靈となつて、人間が出來てゐる。その直靈の光りを全身に輝かして、さうして、それに反對するところ

のいろ〳〵の魂を壓伏さしてしまつて、さうして、統一した一體となつて、ぶつかつて行かなければなりません。

どうしたら己れを統一出來るか

そこで、どうしたならば、統一が計れるかといふことになると、日蓮上人が、南無妙法蓮華經といふことだけを、絶えず唱へてをれとか、或は、南無阿彌陀佛と唱えてをれとかいふやうに、一つの言葉を、絶えず唱へて居るといふやうなことも統一の一手段、一方法であります。

そこで、これは昔からの古事記その他の書物の中に出て居るさうでありますが、古典の眞髓を究めた人の話しによると、今日、靜座とか何とか、いろ〳〵な方法が、行はれてゐるが、それは昔からあるのださうであります。

神代から、統一の方法として、傳へられてゐるものは、振魂といふものを、絶えずやるのださうであります。

その振魂といふものは、つまり、左右の手を抱き合せて、下ッ腹に力を入れて、例へば神の名を唱へつゝ力を込めて、上下に振るのださうであります。

例へば、天御中主大神が、根本の神様である、宇宙の大主宰者である。その神様の名前を唱へて、振魂をする。即ち、『天御中主大神、天御中主大神、天御中主大神、天御中主大神』と唱へると、自然と全身が動いて來る。ちやうど、南無妙法蓮華經々々〳〵と、いふやうなことを唱へて、下ッ腹へ力を入れてやつてゐると、身體が、だん〳〵浮いて來る。神様の名前を唱へて、我は神である、神と同じものであるというて、つまり、『天御中主大神、天御中主大神、天御中主大神』と、絶えず唱へて、下ッ腹に力を入れて、振魂を盛んにふりますと、勇氣は、身體にみち〳〵て來て、自然と、身體全部が統一出來るのださうであります。

これは、暇のある度毎にやる。これらが、昔から言ひ傳へられたる、精神統一の一つの

方法であります。

それから、また、よく昔から氣合といふことがある。私共は知らなかつたが、氣合といふことも、意味があるのださうであります。それは醫學の上から研究しても、立派な理由があるさうであります。

氣合といふことも、これは、矢張り昔から、神代の時代から、言ひ傳はつた一つの教へがある。その教へを、これは、むづかしい語でありますが、『健詰』と稱する、古事記の中にも出て居りますが、その方法は、どうするのかといふと、氣合である。下ッ腹へ力を入れて、『イーエッ、イーエッ』かういふことをいふ。それから、『エーイッ、エーイッ、エーイッ』かういふやうに氣合をかける。しかし、この氣合は、何のためにかけるかといふと、全身を統一させる一つの方法である。なほ健詰の外に、健雄といふ方法もあります。その健雄、健詰といふものが、神代から口傳に殘つて來た一つの秘事であるさうであります。

つまり、世の中には、いろ〳〵の惡魔がある。世間の惡魔ばかりではない、いろ〳〵と惡い魂が、勝手氣儘なことをしようとして居りますから、さういふ氣儘な惡魔共を征服してしまふ。さうして、また呼び起して、一つの者に同化してしまふ。それが、即ち、自分の身體を全然統一するといふことになるのであります。

所謂、オタケビ、オコロビを行ふといふことは、即ち、統一の方法であります。

また、勇氣が非常に出て來る、その勇氣をもつて、世の中に處して行くといふことであるならば、何事でも成就するのであります。

われ〳〵人間の中心を尋ぬれば、即ち、天御中主大神の一分子である、一分派である、所謂、各人はその點において、やはり、神様であるのですが、その神様の光りを發揮させないやうに、いろ〳〵の、荒魂や、何かゞ跋扈して居ります。その跋扈してゐるのを『イーエッ』で追拂つてしまつて、根本の直靈だけにして後、その人を助け起すといふのが、われ〳〵の務めと見てよろしいのであります。

今日を正しく生きよ

さういふ風に、まづ、己れを一つ統一する、さうして、人をも統一して行くといふことに、日々つとめて見ますと、なか〳〵面白いことであります。

明日といふことは、これは神様の領分で、われ〳〵は、明日のことまで心配することは出來ない、われ〳〵は、今日なすべきことを盡して居れば、後のことは、神様の思召しにお任せして置けばよいのであります。

神道で、かういふことをいふ、例へば、お祭禮でもあると、神主が『今日の生日の足日の、大日の吉日の』といふことをいふ。そのわけは、今日といふ今日は、實に生々したる滿足すべき、實に大なる一番好き日であるといふことであります。

何でも、今日といふことには、非常に昔から重きを置いた。おまつりの時の文句には、

必らず、さういふことをいふ。お互ひには、何をいつてゐるのだか分らないが――最も神主様も知らないかも知れないが、だん〳〵研究して見ると、なか〳〵いゝ言葉があります。

所謂、今日一日生きるといふことだけを一生懸命でやる。即ち、氣合でもつて、惡念を去つて、眞の勇氣をもつて、進んで行つたならば、怖れることは、一つもなくなる、恐怖心といふものはありません。

所謂、神様が自分だから、怖れることはない。また、人間は身體が神様といふわけではない。身體の根本の直靈といふものが、神様の分子なのである。そこで、人間が死した時には、神にかへるというて、荒魂といふ物質がなくなつてしまつて、直靈だけになつてしまふ。即ち、ホントの神様の一つの分子だけになつてしまふのであるから、神様に祀るのであります。

たゞ體裁をつくつて、形式的に神に祀るのではありません。立派に神になるのでありま

す。

即ち、荒魂とか、何とかいふ、八百萬の御魂がなくなつてしまつて、直靈だけが殘る。だからして、身體はなくなつても、靈魂は死なない、所謂、人間をつくつて居る根本の直靈は、即ち、存在してゐます。

日蓮上人の信念

かつて、私は子供をつれて、池上の本門寺へ參詣したことがあります。

そこで、つら〳〵考へました。池上の本門寺は、即ち、日蓮聖人臨終の場所であります。六十一歳の生活が終つて、あそこで死なれたのであります。

その日蓮一代記を考へて見ると、所謂、縛られて鎌倉中を馬にのせられて、引張りまわされたこともあれば、伊豆の伊東に流されたこともあり、また、佐渡に四年流されて居つ

たこともある。また龍の口の御難というて、頗る危い目に遭ひながらも、時の執權職に向つては、どこまでも、稍を突いて、宗敵を罵り、己れの宗旨をひろめたのであります。

その日蓮聖人の信念は、どこから出たかといふと、これは、やはり、自分がつまり日蓮宗をひろめるために、この世に生れて來たものである。その宗旨のひろまるまでは、どんな迫害にあつても、害は決して自分の身に及ぶものではない、もし、自分を切らうとするものがあれば、刀は斷々に折れてしまふのであらうといふやうに、深く〳〵信じてしまつたのであります。

それから、釋迦の御經の中に、何千年の後には、一人の行者が現はれて、さうして、日蓮宗を擴めるといふことが書いてある、その行者は我である、それであるからして、いろ〳〵お經に書いてあるやうに、いろ〳〵な迫害を受けるが、最後の勝利は、必ず自分にあるといふことを、深く信じて居りますから、少しも怖がらない。例へば、鎌倉の小街の辻說法の如きは、あらゆる迫害を受けて、石を投げるもの、歸途を擁して切りかけるものな

どがあつた。それを平氣の平左衛門で、大勢の人を敵として、やはり日蓮宗を說きすゝめた、といふやうに、迫害を受けても、なほかつ、その目的の日蓮宗をひろめてしまつたのであります。

時の執權北條も、憎しとは思つたけれども、どうしても、彼の信念の固き、信仰の厚い熱烈なる布敎方法には、敵することが出來ずして、たう〳〵、日蓮宗をひろめてよろしいといふ許しが出たのであります。

この信念、この力、これは處世上、事業經營上に必要なことで、何事によらず、正しいと思つたことをやる上には、この信念があれば、成就しないといふことはありません。

私の修養上の原則

私は、ニコ〳〵座右銘といふものを作つて、日々復唱して自己を修養し、私の銀行員の

修養として居ります。私は、これを日々實行して行けば、確かに、聖人君子の行ひといってもよいと信じてゐます。

第一の『不足の思ひをなさぬ事』といふのは、少しも不足の思ひをして居なければ、その人は、この上もなき幸福なのであります。何事も、有難い〳〵といつて、ちやうど、早い話しが、思ひがけない褒美を貰つた時に、有難い、嬉しいといふと同じやうな感じを、年中持つて居つたならよからうと思ひます。

例へば、女中を雇ひましても、無理な叱言をいはずに、女中が、ゐるために、自分達が御飯を炊かなくてもよい、有難いことである、つまり、何事にも、感謝の念をもつてやつて行けば、不幸とか、煩悶はなくなつてしまひます。この第一ケ條だけを說いても、いろ〳〵の意味を含んでゐて、これだけでも、實行して行くならば、確かに、その人は、ニコ〳〵した境地に生活することが出來ます。

第二には『今日一日腹を立てぬ事』といふのであります。その日〳〵に、これを實行し

て參りましたならば、喧嘩口論といふやうなことも、なくなるでありませう。ストライキとか、もしくは、いろ〳〵の不幸災難といふやうなことは、我儘の心が起るから、起つて來るのであります。

第三番目の『今日一日嘘をいはず、無理を爲さぬ事』といふ通りに、行なつて行けば、恥をかくといふ事はありません。また、無理なことをせず、それ〴〵の範圍において、生活して行けば、決して、困るといふことは、ない筈であります。それを、無理な不相應の生活をしたり、何かしますから、そこに不足が起つて、借金もしなければならぬ、その借金を返すことが出來ないから、ついには、自分の愛すべき子供や家内に、悲しい思ひをさせるやうな、悲慘な狀態に陷ります。要するに、無理なことをしてゐるからであります。

また、人の信用を失ふといふやうなことにもなる、あれは、どうも、ちつとも、信用が出來ないといふやうなことは、多く嘘をいつたためであります。いつも無理をしないやうなことであつたならば、その人は、必らず、幸福な位置に達することは、疑ひのないこと

であります。

第四に『人の惡をいはず、已れの善をいはざる事』といふことは、勿論の話しで、つまり、惡口をいつたり、自分が偉さうなことをいつたりすると、非難攻擊といふものが起ります。非難攻擊の根本は、みな、さういふところに歸因いたして居ります。

第五に『今日一日の存命を喜び、稼業を大切に勤むべき事』といふことを、常に思ふて一生懸命で、商賣を勉强して居れば、否でも應でも、だん〳〵と、商賣は繁昌して行くことになります。

商賣が繁昌しないといふて、何か儲け口は、ないかといろ〳〵工夫をするやうな人がありますが、一生懸命で、稼業を勉强すれば、それが、即ち、商賣繁昌の本となるやうなもので、他に、いろ〳〵儲け口や、何かを求めたり、或は、他に、百千工夫を疑らす必要はありません。

それより、日々〳〵、五ケ條の通りを實行して行けば、その目的は、必ず達せられます。

さうして、身體は丈夫になるし、所謂、煩悶はなくなるし、無理なことはしないからして、家庭も圓滿になる、一生懸命で勉强するから、商賣は繁昌するにきまつてゐます。

すべて、人の所謂、幸福といふものは、誰々、この五ケ條によつて、必ず充分にみたし得らるゝものであります。

それですからして、このニコ〳〵座右銘通りを、日々實行さへして居れば、自然と、さういふやうな身分になるから、その他のことで、金持にならうとか、或は身體を丈夫にしようとか、家庭を圓滿にしようとか、希望する必要はありません。

このニコ〳〵五ケ條だけを、一生懸命で、日々〳〵守つて參りますれば、確かに、さういふ仕合せのよい身分になります。

事業と信念

人を教導する事業

われ〳〵は、一面において、事業家であり、また、一面においては、教育家であり、宗教家であるといふやうに考へてやつて居ります。

私の事業は、人に勤儉貯蓄を教へ、かつ、實行せしめるのであります。誠に、眞面目な事業であります。

金を貯めるといふことは、やさしいやうで、なか〳〵難かしいものであります。また、勉強するといふことも、口でいふては、譯のないことであるが、さて、實行は、なか〳〵難かしいものであります。

その難かしい『勤』と『儉』とを教へるのが、われ〳〵の仕事で、たゞ教へるばかりではない、たゞちに實行せしめるといふのが、われ〳〵の日常の勤務であります。

實行せしめるには、どこまでも、親切に、誠意をもつて、その人のために、盡すといふ心懸けで、人を導かなければ、人は承知するものではありません。また、貯金の功果をあげるといふことも、難かしいものであります。

だから、一面から見れば、確かに、一種の教育家といふてよろしい。また、一面からすれば、宗教家、牧師と同じやうな立場であらうと思ひます。

たゞ、世間の事業家の常にする、金を儲けさへすれば、よいといふのと、われ〳〵のは違ふ。儲けるために、われ〳〵は、この事業をやつて居るのではなくして、『人を善道に導き、さうして、圓滿な家庭をつくらしむるといふことには、まづ第一に、勤儉貯蓄を鼓吹實行せしむるにあり』といふやうな見地から、この事業を、鼓吹してをるのであります。

また、ニコ〳〵主義を宣傳してゐるのでありますから、世間普通の實業家といふやうな意味合ではなくして、一面には、教導職を帶びてゐるといふやうな覺悟をもつて、われわ

れは、日々〳〵、この業務に當ることを要するのであります。

しかる上は、お互の行動が、その教導職としても、恥かしくないやうな行をして行くといふことが、まづ第一に必要であります。

日々〳〵、正しい行をしてゐる、間違つたことは、一切しないといふことを、自から模範を示して、人を教へ、人を導くといふことに心懸けねばならぬから、われ〳〵の任も、重かつ大なるものであります。

しかしながら、世の中のためになる上から思へば、實に、愉快なる職業と思ふて、滿足して、不平もいはず、煩悶もせず、日々〳〵、自分の能力を盡して、この業務の擴張、發展に從事して居るといふことは、何よりも有難いことだと思つて居ります。

國の富を增す事業

國家の富を增すといふことは、所謂、勤儉貯蓄が、一番有効であらうと思ひます。

また、國が富み、家が富めば、從つて、家庭は圓滿になる、その人達の、所謂、行ひも正しくなる、兎に角、勤儉貯蓄といふことは、すべての幸福の基になるのでありますからさういふ仕事に、われ〳〵は、日々、從事してをりますので、これ以上、立派な仕事は、なからうと思ひます。

從つて、他を顧みずして、この事ばかりに、從事して、なほ、及ばざることを私共は恐れてをります。

世間に、仕事は色々ありますけれども、その中で、勤儉貯蓄の鼓吹實行といふことは、すべてのものと比較して、一層、必要に考へられます。その必要な事柄を、お互ひに、日々、人に勸めてゐるといふやうなわけでありますから、その勸めた結果を、充分に發揮させるといふことが、最も、肝腎で、たゞ、單純に金を集めるばかりではありません。

その集めた金を、中層以下の金融に提供するといふ必要があります。西洋の所謂、庶民

銀行のやうな組織で、あくまで、やりたいと思ふのであります。

つまり、餘つた金を貯めさせる、その貯めた金を、貯金した人達の融通に提供する、その人は、その金を使用して、商賣の發展をはかる、そして、餘つたものを、こちらへ預けるといふやうなことで、相互の利益になります。

銀行は、たゞ、その中間に立つて、取扱ふといふだけに過ぎません。出來得る限りは、利益も貯金者に提供して、分配するといふやうな組織に段々〳〵して行きたいと思ひます。

ここに、特に、述べたいことは、お互に、これからの生涯を、最も意義ある生涯に終りたいと思ふことであります。そして、また、最も國家を利するやうな方面に、この身體を投じて見たいと思ふことであります。

また、正しい道をあくまで、履んで行きたいと思ふことであります。それが、即ち、この銀行をして、ます〳〵發達させて、大勢の人をして、幸福なる生活を營ませ、ひいては國の繁榮を來すといふやうなことになつて行くことを信じて居ります。

正しい道を行く

正しい道を履むといふことは、よく口にしますが、實行は、難かしいことであります。しかしながら、どう考へても、世に處する最良の方法は、正しい道を履んで行く、といふ他にはないやうに、私は信じて居ります。

正しい道を履んで行くには、如何にしたらよいか、これは、頗る大問題であります。小學校や、中學校、大學校あたりで、倫理といふ科目があつて、教へてをりますが、これは、たゞ理窟にとゞまるのではなからうか、と思ふやうな點もあります。

そこで、正しい道を、お互ひが履んで行かなければならぬ、また、責任上、履むべき必要があるといふことについて、一番、有力なのは、われ〳〵は、眼に見えない或者から、絶えず、監視をされてゐるといふことを、心から承認する、即ち、認めるといふことが、

一番、肝腎であります。

宇宙に、一つの偉大なる力が存在して、絶えず、監視してゐるといふことがきまるならば、われ〳〵は、どうしても、正しい道を履んで行かなければならぬことに、歸着いたします。さうでないと、正しい道を履めと云はれてもなか〳〵、心から承認することが出來ない。なか〳〵實行せられないのであります。もし、みなが正しい道を履んで行くといふことになつたならば、世に罪人といふものが、なくなつてしまつて、監獄といふものも、なくなつてしまふ。また、裁判所といふものも、なくなつてしまふだらうと思ひます。

眞の黄金世界といふものは、すべての人が、正しい道を履むといふことでなければ、來る時はなからうと思ひます。

正しい道を履むには、宇宙に、偉大なる或力の存在してをることを承認するのが、一番よろしい、一番早い方法であらうと思ふのであります。

愉快にやる仕事は必ず成功する

私は職業即趣味でありたいと考へてゐます。

どうも、此の職業を、これは商賣だから已むを得ないといふので、イヤ〳〵やつてゐるやうでは、どんなによい職業でも、決して繁昌するものではありません。又、これが勤め人であるならば、さういふ人は、決して成功するものではありません。

人の心といふものは、誠に妙なものでありまして、惚れて通へば千里も一里で、自分の好きな事なら、決して苦しくないのであります。否、却つて樂しみなものであります。

然るに、これは商賣だから仕方がないといふので、あまり愉快に感じないで、その商賣をやると、その商賣は、必らず成功をいたしません。併し、それを此の商賣は、實に面白い愉快なものであると考へて、喜こび勇んで從事いたしますと、必らず、成功するのであ

ります。

たとへば、毎朝、主人に言ひ付けられて、拭掃除をさせられると考へると、ヤレ寒いとか、ヤレ冷たいとか、いろ〳〵苦情が出て、自然、掃除も疎かになりますが、それを、これは人のためではない、自分の身體をよくする、一つの運動である、たゞ鐵アレーを持つか、雑巾を持つかの相違である、誠に有難いことであると考へて、力を入れて掃除をすると、自然、綺麗になる、さうして身體も丈夫になるのであります。

それを主人の言ひ付だから仕方がなしにやる、月給を貰つてゐるから、仕方がない、いや〳〵仕事をするといふのでは、決して、面白い仕事は出來るものではありません。

其所が、職業に對するお互ひの心の持方の、大切なところであります。例へば、集金にしても、勸誘にしても、嫌々やるのでは、能率が擧らぬのが當然であります。

今日、私共の不動貯金銀行にはずいぶん、多くの預金者がありますが、先方様から貯金をさせてくれといふておいでになつた方は、多くさんあるものではありません。悉く皆

一人々々に説いて、さうして貯金者になつて頂だいたのでありまして、却々容易ならぬ苦心の結晶であるのであります。誰一人として、ヤア不動さんか、よく來た、待つてゐたといつて、貯金をしてくれるものではありません。皆一通りならぬ苦心の後に、お得意様になつて頂だいたのであります。併し、其所が又、お互ひの樂しみであるともいへるのであります。

よく私は申しますが、御客様は砂糖の結晶である、砂糖の結晶である以上、水に解ける性質をもつてゐるのでありますから、必らず終ひには、貯金者になる可能性をもつて居るのであります。それを一寸、水に入れて見て、これは迚も解けないからといふて、直ぐに出して捨てゝ終つては、いくら、お客様を勸めて見ても、決して入るものではありません。熱心に、根氣よく、幾度も〳〵も、勸めて居れば必らず解けるのであります。尤とも勸めて行つて、直ぐに入つて了つたのでは物足りません。いろ〳〵世話をやかされて、終ひに入つて貰ふところに、趣味があるのであります。

たとへば、碁を圍んでもさうであります。あの石を、どういふ風にして攻めてやらうか效を斯う切つて、さうして效から攻めてやらうなどゝ、いろ〳〵工夫をして、夫から後に漸く勝つといふところに、何ともいへぬ興味があるのであります。

正義が第一

亞米利加のゲーリーといふ富豪に、或人が成功の秘訣はといふて聞いたとき、ゲーリーがいふのに、別に難かしい事ではない、正直と正義と智惠である、といふたさうであります。

正にその通りで、人間は正直でなければいけません。正しくなければ、どんなに智惠があり學問があつても成功は出來ません。又、正義でなければいけない、世の中には、いろいろな餌をつけて、人を欺す人がある。少し金でも持つてゐやうものなら、餌をつけて釣

り出しに來ます。成程、甘さうなものだと思つて、ウツカリ其の餌を食べやうものなら、引掛つてひどい目に遭はされる。さういふときに、甘さうだが、これを食ふ事が正しいかどうか、先づ利害得失を考へないで、正か不正かで判斷をする、さうして、正しくなければ、決して食べぬといふ事であるならば、決して釣にかゝる憂ひはないのであります。

それから、第三は智惠、これは、どんな事業に對しても必要のことであります。たとへば、貯金を勸めたが頑固でなか〳〵入つてくれない。よし、何とかして加入させやうといふので、いろ〳〵勸誘の方法について考へる、これが智惠であります。さうして、此方の思つた通りに加入させる事が出來ると、誠に愉快であります。ですから、成功の秘訣に、正直、正義、智惠といふものは、なければならぬ必要條件であります。

然るに、學生の內にカンニングをするものは、決して後に成功をしない、といふのは、ゴマ化す事のみを考へますから、眞の勉强が怠り勝ちになるのであります。從つて、本當の勉强が出來て居らぬから、イザといふ時に失敗をするのであります。又、銀行の成績に

してもさうであります。ゴマ化す事をする人は、決して成功するものではありません。何所までも正直に、熱心に、根氣よくやる人が成功するのであります。

殊に、職業即趣味といふ感じでやれば、毎日の仕事が面白く、誠に愉快に從事出來るのであります。

驚くべき信念の力

自己暗示と念力

よく自己暗示といふことをいひますが、自己暗示は、御承知の通り、身體は健康、精神は鞏固、事業は成功といふことを、自分で自分に暗示を與へ、信念を持つのであります。

つまり自分の身體が丈夫である。自分の精神は強い、自分の事業は成功するといふ自己暗示であります。今日の心理學の上から行きましても、暗示作用の効果は、恐るべきものであります。その作用によつて、やはり、その弱い人でも丈夫になつてしまふのであります。

また、事業が、まづく行つてゐる人でも、成功すると深く信じて居りますと、その人の事業は、だん〳〵成功して行きます。

また、自分の意志が弱い、薄弱であるといふやうな人でも、自分の意志は強い、自分の

精神は鞏固であるといふ觀念をもちますと、その人は、だん〳〵強くなります。

自分の念力、一心といふものは、一心が籠りますと、その思つたやうな結果を、其所に現はします。

ちやうど、神様の前で、家内安全とか、いろ〳〵拜みます。その念力作用と同じやうに自己暗示で、身體は健康、精神は鞏固、事業は成功といふことを深く信じて唱えますと、チャンと、それだけの效果を現はすといふことは、決して、疑ひを容れる餘地はないのであります。

念力の驚くべき實驗

私は、かつて福來博士から面白い話を聞きました。

千里眼の能力者、先には千鶴子あり、郁子あり、高橋貞子といふ婦人もありましたが、

みな、これらは亡くなつて、今は、千里眼の能力者としては、三田光一といふ人があるさうであります。この三田光一といふ人が、各地で千里眼や、透視の實驗をやつて居りました。

これは、以前岐阜でやつた時の話であります。

多數の人の集まつた前で、やつたのですから、ごまかしも何もないのであります。いろ〳〵聽衆の中から、かういふことを一つ透視してもらひたい。さうして、こゝに寫眞の種板がある。この種板に、見て來たことを寫してくれといふやうな注文で、ようございますといふので、三田といふ人が、所謂、その念寫を行なつたのであります。

念寫といふのは、所謂、自分の心で思つたことを寫すのであります。

そこで、大垣の城を一つ寫してくれといふ注文が出た、ところが、この三田といふ人は大垣城を見たことはないのです。ようございますといふので、ちやうど、二分間ばかり、眼をとぢて、無我になつてゐたさうであります。

それから、暫くして、『モウチヤンとそこに寫つてゐます』といふのであつたそうであります。

そこで、その寫眞を現像して見たところが、大垣城が寫つて居つた、さうして、その時に三田といふ人がいふのに、

『私は、まだ大垣城を見たことがないから、かうやつて眼をつぶつて大垣城を見に行きました。ところが、城の側に一軒の家があつて、そこの家へ行つて、大垣城はこれですかといつて聞いたところが、そこに六十有餘の老人がをつたが、親切にこゝから行くとよろしいとよく敎へてくれました』

といふことを、三田光一氏が、その席上でその時話しをしました。それを聞いて居つてすぐに刑事が大垣へ出かけて行きまして、城のそばにある家を訪ねて、

『九時とか十時とかに、誰か來た人はありませんか』

と老人に聞くと、老人は、

『あゝさう〳〵、さういへば、フロックコートを着た、頭髪を分けた人が、年齡はこの位の人で、大垣城はこれですかといつて、聞きましたから、よく敎えてやりました』

といつた。そこで、刑事は驚いて歸つて來て、それをみんなの所で報告したといふことが、新聞に出て居たさうでありますが、これは面白いことであります。

つまり、三田といふ人の、念力が大垣城を見て來たので、その念力が、一人の人間の姿になつて見て來たことになる、ですから、かういふことが、だん〳〵實驗されますと、幽靈なんといふものは、確かにあることになるのであります。

それから、モウ一つは、隨分突飛の聽衆で、岐阜の何とかいふ遊女屋の何々といふ女の部屋を見て來てくれといふ注文を出したさうであります。

それから三田さんは、眼をつぶつて二分ばかりで分りました。

『その部屋の右手の方の欄間には、どういふものが彫つてあつたとか、こちらの方の額には、何が書いてあつた』

といふことを當てたさうであります。さうすると、

『全く當りました』

というて居つたさうであります。

それをまた刑事が聞いてすぐに遊女屋へかけつけて行きましてドン〳〵その部屋へ入り込んで見たところが、果して、三田といふ人がいうた通りの額がかゝつて居つたといふことであります。

その時に、その女がいふのに、

『今晩ぐらゐ可怪な晩はない、先刻若いハイカラのフロックコートを着た人が、默つて自分の部屋へ來て、頻りに見てゐました。そのうち、そゝくさと歸つてしまひました』

三田氏も、その通りいうて居つた。またいま貴下が見に來た、何で、この部屋をさう見に來るんですかといふことを、その女がいつたといふことが、新聞に出て居つたさうであ

ります。これは事實であります。さういふやうなことは、たび〳〵三田といふ人によつて實驗されて居ります。

さういふやうに、念力といふものは、よほど不思議なもので、心で思つたことは一つの力となつて、すぐに現はれます。

惡いことは出來ぬ

人の念力といふものは、エライ働きをするといふことを、深く考へなければならぬ。それでありますから、むごたらしい殘忍酷薄なる所業をいたしました人は、大勢の人に恨まれますから、みんなの念力が、その人を始終とりまいて、その人を苛めつゞけるといふやうな働きもしてゐることゝ思ひます。

さういふやうなことから考へますと、所謂、殘忍酷薄のやり方は、出來るものではない

人に恨まれるやうな行ひは、到底、出來るものではないといふことも、また考へなければなりません。

さういふ念力の働きの如何なるものであるかといふことを知らぬものは、『そんなことはあるもんか、ドン〳〵惡いことを構はずやれ、ドン〳〵苛めつけてやれ』といふやうなことで、所謂、高利貸なんかは、隨分細民を苛めつけて、それらの人々の思ひが、積り積つて、その者にたゝり、その子孫にも影響するといふことになります。

また、その人間がこの世を終つて、再び、この世に來る時に、前世において、さういふ惡業をして居つたといふのが、來世において、また、いろ〳〵祟りをして、不幸災難なんぞといふやうなことがつゞいて、やはり、自分のやり方の惡かつた結果が、ここに現はれて來るといふやうなことになります。

そこで、この因果應報といふやうなことも、決して、爭はれないことになります。さういふやうなことを、だん〳〵研究いたしますと、どうしても、惡いことは出來ない。人が

見て居ないから、惡いことをするといふやうなことではいけない。善いことをして、たゞちに結果がなくても、いつの世にか、さういふ報ひが來るといふことを、深く考へましたならば、どうしても、正しい道を踏んで、一生を終るといふことを心懸けるのが肝腎であります。

まづ、この自己暗示、即ち、暗示作用によつて、身體も丈夫になるし、それから、精神も鞏固になるし、事業も成功するといふやうなことは、決して、効果のないことではない。その念力の働きで、確かに、さういふ効果を現はし得るものであるといふことは、寸毫も私は疑がつて居りません。

人

に

勝

つ

精神力の偉大さ

豐臣秀吉といふ人は、御承知の如く、尾張の國中村の一百姓から身を起し、遂に、天下を平定、國威を海外にまで輝かした人であります。その人の言葉に、

『負ける負けると思へば負ける。勝つ勝つと思へば勝つ』

といふのがあります。

私は、この言葉に非常に感心して居ります。流石は秀吉の言葉だと思ひます。秀吉はこの言葉を常に心に讀みながら、戰場にのぞみ、必ず勝つたのであります。所謂連戰連勝、遂に、あの地位を獲得したのであります。

『負ける負けると思へば負ける、勝つ勝つと思へば勝つ』こゝに成功の秘訣があります。

即ち、我々には、心といふものがある、この心は、神に通ずるもので、我々が仕事を遂

行する上には、この心の援助を受けることが必要であります。

心の働きは、洵に靈妙なもので、心に念じたことは、其のまゝ形となつて現はれるのであります。つまり、心に念じたことが神に通じ、『神が其の願意をおきゝとゞけ下さることになる』のであります。

さういふ風に、神は、人間の心を通じて現れ、常に人間を向上させやうとして居るのであります。

『人間は、神の子である』といふ言葉のある所以であります。でありますから、我々が一つの仕事に成功しやうと思ふならば、熱心に、只管、その事を心に念じなければなりません。

即ち、必らず成功する、成功すると、さう一心に心に念じて、全身的にぶつかつて行くのであります。さうすれば、必らず、其の仕事に成功する事が出來るのであります。

途中、困難に打つかるやうなことがあつても、困難の惡魔は、其の旺盛な意氣に負けて

了ひます。それが、念じ方が足りないと、其の惡魔に負かされて、遂に、仕事に失敗するやうな事になるのであります。つまり、『强固なる信念、大いなる精神力を持つことが肝要』であります。

秀吉は、何んな場合にも、必らず勝つ、といふ强い信念をもつて、戰にのぞんだのであります。さうして、又、必らず勝つたのであります。さうして、この『負ける負けると思へば負ける、勝つ勝つと思へば勝つ』の信念を、益々强固にしたのであります。

私は、この言葉は、洵に味ふべき言葉だと思つて居ります。

大成功をした人にして、はじめて言へる言葉で、我々が日々仕事をやつて行く上に應用して、必らず、効果のある事と深く信じて居ります。

この精神力といふものは、洵に偉大なもので、この事は、心理學上からも立派に說明の出來ることであります。

即ち、自己暗示の効果は、一般に認められて居るところで、その原理によると『專ら心

意を占領するすべての觀念は、實際の身體的、若しくは精神的狀態に變ず』といふのであります。

私の知つて居る人に、非常に精神力の強い人がありましたが、この人は痩せて十二、三貫位しかなかつたが、必らず肥つて見せるといつて、常に其の事を心に念じて居た結果終に二十貫にまで肥滿することに成功したのであります。しかし、不幸にして其の人は、其の後間もなく、他の事から病氣になつて死にましたが、精神力といふものは、さういふ偉大な力をもつて居るもので、常に、心に『斯うしたい、又、必らず斯うなる』といふ觀念を、專ら集中すれば、必らずそれが身體の上に現はれて來るから、不思議であります。

又、さういふことは、心靈學の立場から、幾多の證據があがつて居ることでありまして、それを科學的に說明することは、今のところ出來ませんが、少しも疑ふことの出來ない事實となつて居ります。

心靈學に念寫といふのがありますが、これは、前にも述べたが心で思つたことを、自由

に寫眞の乾板に寫すのであります。例へば、一心に乃木將軍の面影を心に念ずれば、それが機械の力をかりないでも、チヤンと寫眞の乾板に寫るのであります。

普通寫眞は、機械の力をかりて寫すのでありますが、この念寫は、さういふ機械の力をかりないで、直ちに乾板へ心で思つた事を寫すのであります。又、念動といつて、眼前にある物體をたゞ精神力だけで動かすのであります。

無生物の物體をすら、精神力で動かす事が出來るのですから、況して、他人の心を思ふまゝに動かす事は、決して不可能ではないと思ひます。

元來、人の心と心とは、互に相通ずる作用をもつて居りますから、一寸、精神力の強い人なら、相手の心を思ふまゝに動かす事は出來る事と思ひます。

或る精神家の話ですが、其の人が或る日、電車に乘つて居つて、窓際に居る人に向つて己れの精神力を試して見たのであります。先づ、新聞から目をはなさせて、此方（自分の方）を見させたのであります。それから、出口の方を、それから硝子窓の方を、といふ風

に己れの心のまゝに、其の人を到頭玩具のやうに、自由に四方を見向せる事に成功した、といふことであります。

それから、昔から『不動の金縛り』といふのがありますが、これも、念力によつて相手を縛するのであつて、紐を用ひずして、相手は縛され、自由を失ふのであります。これを心靈學上の言葉でいふと、念縛とでもいふのでせう。

又、非常時の今日、國防上の問題が、よく國民の話題に上り、若し、帝都の上空に、敵の飛行機が飛來して來たら何うするか、等といふやうな事が、頻りに憂慮されて居る時、或る精神家が、

『何に心配する事はない、念力で敵の飛行機を墜落させて見せる』

といつたとかいふ話ですが、そんな事が出來るか何うか、そこまでは、私も信じられませんが、併し、全然出來ないといつて了へないやうな氣もいたします。といふのは、彼の弘安四年の元寇の役に、俄かに神風が起り、忽ち敵が殲滅したといふことは、あの時、偶

然に暴風が起つたゝめと解すべきではなく、國民が一心になつて『敵國降伏』を神に祈願した、即ち、國民總和の大なる精神力が、神風となつて現はれたためと解釋すべきであらうと思ひます。

さういふやうに、國民總和の大精神をもつてすれば、敵機襲來に際して、其の精神家がいつたやうな結果が起り得ないとは、斷言出來なからうと思ひます。

必ず勝つと信ずる力

兎に角、この精神力、心の動きといふものは、實に靈妙不可思議のもので、我々が事業に成功するには、何うしても、この力をかりなければならぬのであります。

私は多年、この事業を經營する上に、この心の援助を受けて來て居ります。さうして、非常な困難に遭遇した場合にも、その援助によつて、無事難關を突破して來て居ります。

『負ける負けると思へば負ける、勝つ勝つと思へば勝つ』であります。何んな場合にも、負ける負けると思つてはならない。常に、勝つ、勝つと思はなければなりません。さうすれば、必らず勝つのであります。

例へば、外交で加入のことなどを勸誘する時も、常に、この呼吸で行かなければなりません。入つて呉れるか、何うか知らん等といふ弱氣ではいけない、必らず、入れて見せる、といふ强い信念で打つかつて行かなければなりません。さうすれば、先方は必らず其の意氣込に押されて、此方の意志通りに從ふものであります。

それを、何うもアソコの頑固親爺には敵はない、又、キツト斷るだらう等といふ弱氣で行くと、自然、その弱氣が態度にも現れる譯で、さうすると反對に先方は、あくまでも、持前の頑固を現はしてくるものである、さうして、結局、先方に負かされることになるのであります。はじめから、負けるかも知れない、などゝ思ふから負けるのであります。ですから、勝つ、必らず勝つ、キツト入らせて見せる、といふ强い信念、心中勝つといふこ

との外、何物もない旺盛な精神力をもつて打つかつて行かなければなりません。

全精神を一事に集中すれば、必らず成る、即ち、『精神一到何事か成らざらんや』であります。『念力岩をも通す』であります。猛虎だと思つたればこそ、岩にも矢が突通つたのであります。精神集中の偉大なる力、斯ういふ狀態を神道の方では、前にも述べたが、次のやうにいつて居ります。

人間の心、魂、といふものは、直靈といつて、これが人間の根本であります。其の直靈は、この大宇宙の主宰者たる神の分派、分神であつて、其の直靈なるものが中心となつてさうして、いろ〳〵の魂が集り、一個の人間をなして居るのであります。ソコで、其の直靈、其の他いろ〳〵の魂が、神の命に從つて、身體全部を統一して居る時は、其の勢力は非常なもので、それこそ火の中に入つても燒けず、水の中へ入つても溺れずといふ狀態で、丁度戰爭の時の突喊、あの何物をもつてしても、防ぎきれない怖ろしい勢力を示すのであります。

人に勝つ

即ち、勝つ勝つといふことに、全精神が統一されゝば、其の當るべからざる勢ひによつて、必らず勝つのであります。すべて、其の調子で、我々は、日々の仕事を進めて行かなければなりません。さうして、ドン〳〵勝ち抜いて行く、さうすれば、期せずして成功の彼岸に到達するのであります。

『負ける負けると思へば負ける、勝つ勝つと思へば勝つ』

この言葉を忘れず、奮闘することが肝要であります。

人生悲觀は禁物

樂天生活をなせ

われ〳〵は、御承知のニコ〳〵主義といふものを、鼓吹してをります。

即ち、樂天生活をして行くことが、人生に、最とも必要で、悲觀は、禁物であるといふことを常にいうてをります。

悲觀病にかゝつた人は、病院に行つてゐるやうなもので、さういふ人の所へは、決して福の神は、舞ひ込んで參りません。

勇氣のある、顏色のよい人の所へは、福の神が、惠みを與へるに違ひない。大黑樣のやうに、ニコ〳〵した容貌を、お互ひは待つて居らねばなりません。

兎に角、大黑樣のやうな、容貌を常にしてゐるといふことに心掛けることが、最も、大切であらうと思ひます。

それは、形を眞似ることも結構でありますが、道理の上からも、悲觀は、無用だといふことを、根底から考へて置く必要があります。

人生食ひはぐりはない

前にも述べたが、私は、かういふ考へをもつてをります。われ〳〵が、勝手に、この世の中へ生れて來たのではない、神樣の御都合で、われ〳〵は、こゝに生れて來たに違ひないのであります。

われ〳〵が、勝手に、口だの、胃の腑だのを、こしらへたのではありません。さりとて兩親が、こしらへたのでもない。妙な不思議な力が、われ〳〵を、こゝに生ぜしめたのであります。

けれども、馴れゝば、なんでもないやうに、あの太陽、不思議千萬な太陽も、馴れゝば

當然のやうに、人は思つて、平氣で居ります。

こういふやうに、平氣にすべてが、なつてしまふことが、大變必要なことです。

しかるに、ア、いふ不思議な天象、所謂、萬象を平氣で見てをつた人間が、平氣でゐて差支ない事柄を、非常に氣にしてゐるといふやうな、弱點を持つて居ります。

こゝに、空氣がなかつたならば、一日も生活は出來ません。しかし、空氣がなくなるといふことは、誰しも考へては居りません。これは、餘程不思議ではないかと、私は、思つて居ります。空氣だつて、どういふ關係で、上の方へ昇つて行つてしまつて、なくなつてしまはないとも限らぬと思ひます。

それは、引力の關係で、そんなことは、ないと考へるかも知れませんが、その引力なるものを、神樣が、こしらへたのですから、また、それをとつてしまふことが、出來るかも知れません。さうすれば、いくら、金を積んで置いても、生きてゐることは出來ません。

しかるに、食ふことが出來なくては、大變だといふことだけは、どういふものか、誰し

も非常に心配して居ります。

しかし、この何千萬年、何億萬年の昔から、人類が、やはり地上にをつたに違ひないのであります。けれども、その人達が、一生涯差支へないだけの食物を、チャンと、こゝに積上げて、オギャーと生れて來たのではない。生れたときは、全く裸體です、着物も、何も着てはをらぬ、しかし、生れると、すぐに乳房を吸ふやうに、チャンと出來てゐる、乳といふものを、あてがふやうに、チャンと神様が、こしらへてある、その乳を吸ふといふことを、誰に教はつたか知らないが、自然に乳房を吸ふて、だん〳〵子供は大きくなつて行きます。

前からチャンと、用意をして來ないでも、用意をしたと同じやうに、出來てをります。この天の構造の妙があることを、忘れてはならぬと思ひます。

空氣がある、空氣があれば、必ず吸ふ道具がある、ですから、呼吸機關があるならば、空氣は、チャンと存在するといふことがいへます。

人間ばかりではない、他の動物にも備はつてゐる、備はつてゐるのは、神様が、空氣をつくつて置いたといふことが想像出來ます。想像ではない、さうなつて居ります。

それと同じやうに、口を與へた、口の役目は、食物を攝る、さうして、攝つた食物は、胃の腑で、消化して行くといふことに、なつてをります。

胃の腑を與へられてゐる以上、チャンと、食物を、どこかしらに、お與へなすつてゐるに違ひないと思ふ、口をつけて、お置きになつた以上、食べられるやうに、チャンと、どこかしらに食物が與へてあるのです。何千萬年、何百萬年の昔から、餓死したといふことはないのであります。

生れた時に、食物は一生涯の用意をしなくとも、どうかかうか、食つて行かれるのであります。生れてから今日まで、別に用意して置いたわけではないが、マア〳〵三度々々、無事に生活して來たことは、不思議のやうで、不思議ではありません。

チャンと神様が、用意しておいでになるに違ひないのですから、食ひはぐりがあつては

大變だ、といふやうな考へを、棄てゝしまふことが肝腎だらうと思ひます。

しかるに、人間の悲觀の材料は、食ひはぐりといふことが、一番であります。しかし、世の中は、そんなものではない、チヤンと神様が、さういふやうに用意をして、至るところ青山ありで、どうかかうか、食はせるやうに出來てゐるといふことを考へて、そんな點を、心配しない方が利益であらうと思ひます。

正しく働けば必ず食へる

そこで、例へば、永年從事してをつたのに、何かの都合で、職に放れるといふことも、人生の複雜なる今日、時々起つて來る問題であります。そんなことがあると、どうしたらよからうかというて、苦勞するものがありますが、これも、いまいふ通り、どうかかうかやつて行けるやうに、神様がお與へ下すつてあるに違ひないといふことを確信して、成行

に任せた方が、一番よからうと思ひます。

人間の淺慮な智惠で、いろ〳〵考へるよりも、さういふやうなことは、すべてお任せしてしまふといふことが、一番利益なことではあるまいかと思ひます。

そこで、十年なり、十五年なり、一生懸命で働らいて、多少の貯蓄も出來たが、利息で遊んで、一生涯暮すことが出來るといふまでには、金が出來てをらぬ、さういふ時に、職を離れたら、あとが誠に心配だといふことを、よく私は聞きます。これは無理な咄で、みんなが、一生涯遊んで喰へるやうに、金をためて、遊んでゐるといふことは、事實上、出來ません。また、そんなことを、したからといつて、それが安心でも何でもありません。

御承知の露國の皇帝は、世界で一番の金持でありました。しかるに、何程、金がたくさんあつた人でも、すべての財産を失ふたばかりでなく、虐殺されたといふやうなわけでありますから、そんな富を、いくら積んでおいたからといつて、安心ではありません。

しからば、何が一番安心かといふと、われ〳〵の心掛が、一番必要だと思ひます。兎に

角、われ〳〵が、こゝに生れて來てゐる以上、食物は何所かしらにあるのだから、それを働いて取つて養なつて行くといふのが、一番大切であります。

そこで、働らきさへすれば、取つて養なつて行けるやうになつてゐる。たとへば、この手脚を充分に使つてやつて行けばよい、それを充分に、活動せしむるといふことを忘れてはなりません。

しかるに、間違つた方面に使ふと、災難不幸が出て來る。この口といふものは、所謂、意志を表すためにも、一つの役をしてゐる、それを餘分なことまで、饒舌つたりなんかするから、災禍が出て來る、『口は禍の門』といふのは、それが相當の役目として、つけたものを濫用した結果であります。

また、例へば、胃の腑は、消化するやうに出來てゐるが、それに必要以上のものを入れるから、病氣になるので、この天の與へた道具を、或程度に止めて、それを有用に、日々活動さへして行けば、決して、生活に差支へることはないと思つて居ります。

それでありますから、今日一日は、よく自分の切ての道具を使つたかどうか、頭も、眼も、口も、手脚も、充分に活動させたかどうか、といふことを、日々顧みて、さうして、充分に、それを活用することが、生活を向上させることに於ても、最も、必要な事柄であります。

さういふ道具を、有效に働かせるといふことを考へずして、小利巧に、狡いことで、世の中を渡つて行くといふやうなことは、みんな間違ひの種と思ひます。

天の與へた道具を、最も有效に、使つて行くといふことに、心掛けて行くならば、間違ひはないと考へます。

三ツ割生活法とは何か

そこで、例へば、十年でも、十五年でも、一生懸命に働いて、こゝに積立やら、貯蓄や

らで、二千圓でも、三千圓でも出來てゐる、しかし、それだけでは、職に放れた時に困るといふので、隨分、苦勞してゐる人があるが、そんなことは考へるものではありません。

さういふ場合において、かういふ方針をとつて、生活したらよからうかと思ひます。

それを、私は『三割生活法』と稱します。何でもないことですが、自から、その間に、多少の妙味があると思ひますから、次に述べて見ます。

こゝに、多年の勤勞の結果、三千圓の貯蓄があつたとします。その時に、その人が、どういふ都合かで職を放れたとする。三千圓ばかりの金では、銀行に預けて置いても、五分か六分の利子しかとれませんから、五分として、百五十圓にしかならない、今まで、月に七八十圓の生活の出來る給料を貰つて、一年千圓の生活をしてゐた、しかるに、職を放れて、一ヶ年百五十圓ぢや暮らしが出來ないからといふので、非常に心配する人がある、その時に、どうするかといふ實際問題であります。

私は、かういふ方法をとる、三千圓があるならば、その三つ割、つまり、千圓だけを今

年一年だけの生活に、默つてあてゝしまふ、五分や六分の、そんなケチな考へを持たないで、貯めた金の三分の一を、一年の生活費としてしまふ、さうすると、從來の生活程度を下げない生活が出來ます。

ちや、二年目は、どうするかといふことになります。二年目は、また殘る二千圓の三分の一を生活費にあてる、六百六十圓ですが、マア六百圓と見ます。二年目に六百圓に下げることは、決して、難かしいことではありません。今年、千圓の生活をしてをつたものが一遍に五百圓に下げるといふことは、なか〳〵、いうて行はれ難いものです。また、さういふ風に下げてしまふと、後日、職を求める時に、彼れは職に放れたら、あんな慘なことになつてしまつた、といふやうなことは、非常に其の人の人格を傷けます。ですから、さういふ場合には、少くも、一年位ゐは現狀維持をしてゐるといふことは、餘程必要のことゝ思ひます。さうして、翌年になつて、千圓を六百圓に下げるといふことは、何でもありません。

しかし、私は下げなくても、矢張り、前年の生活が出來ると思ひます。それは、何のためかといふと、病氣なれば別ですが、働らける人は、從來一千圓の收入があつたならば、どんなに少なく見ても、四百圓位ゐな働きは自ら出來る、それも、一ケ年職を求める間遊んで、二年目に四百圓位ゐの收入ですから、この手脚さへ、よく活用すれば、必ず得らるゝことであつて、よしんば、自分自身が得られないとしても、その内に子供が大きくなつて、子供が何かに從事して、不足の足前位ゐするといふことになりますから、二年目には矢張り、一千圓の生活が出來るといふことになります。

三年目は、どうなるかといふと、二千圓から六百圓引いて千四百圓ある、それに多少の利子がありますから、千五百圓と見て、その三分の一、五百圓を使ふことにする、三年目に五百圓の生活は、決して、難かしいことではない、それに、三年目には、他から五百圓だけ收入を求めて來て、また一千圓の生活が出來ることになります。それで、もう三年經つてしまふ、しかも、三年經つても、一千圓殘つて居ります。

三年間に一千圓の生活をしても、まだ一千圓の金が用意してあります。

人には、どういふ不幸が、あるか知れぬから、常に三分の一位ゐの生活をして、さうして、そのあとの三分の二は、三年間位ゐやつて行けるほどの餘裕を置くことが、最も必要なことであらうと思ひます。

さういふやうな生活をすると、三千圓ある人は、三年間無事に生活して居つて、なほ一千圓殘り、四年目に三百圓使つても、まだ七百圓は殘つて居ります。

さういふ風に、だん〳〵と小さくはなつて行きますが、十年の後になつても、まだ、多少は殘つてゐる。つまり、小さな恩給年金位ゐになつて居ります。その内に、十年も經てば、それを足し前するだけの收入が、得られますから、一生涯を通じて、やはり、どうかうか、食つて行けます。決して心配することは要りません。

そんなことが、不幸にして、あつた場合には、私が述べた三分の一生活をすることが最も必要であります。

それを利息でやらなければ、貯めた元金が減つてしまふといつて、悲觀する人がありますが、悲觀することは要りません。悲觀したつて、減るものは減るので、利益はないのですから、さういふ生活方法をとる方がよい、人といふものは、決して、食ふに困るものではありません。

人生と生活

人間生活と食物

さて世の中は、最も樂觀的に生活するといふことが、一番大切のやうに考へられます。然るに、兎角悲觀病に捉はれて、やゝもすると、悲觀してしまふといふことが普通人間の狀態であります。

尤も、一ぱい呑んだといふやうな時は、大層景氣のよいことを申しますが、直ぐに悄氣てしまふことを度々見受けます。

どうか如何なる場合に於ても、一切悲觀といふことをしたくないものと考へます。

そこで、この人間生活上に、何が一番悲觀に陷り易いかといふことを、段々考へて見ますと、俗に食へなくなつたんでは、大變だといふのが、一番悲觀の原因のやうに考へます。

それでありますから、食へなくなることが、果してあるものかどうか、其の邊を、一つ研究して見ることは、決して無益ではなからうかと思ひます。

昔から、太陽と米の飯は、何所へ行つても附物だといふことを、よく人が申します。さういふことが昔から言はれて居るにも拘らず、兎角、食へなくなつては大變だといふ心配が、どんな悧巧な人でも、どんな立派な人でも、さういふ考へが時々起る、時々ちやない、常に念頭を離れぬといふ狀態であるやうに、考へられますが、果して、食へなくなるものであるかどうか、餘程、これは面白い研究題目であらうと思ひます。

私の考へるところによりますと、人間は必らず食へるものである、斯う申上げて差支へないやうに思ひます。

それはお互ひの僅かな智惠、若くは才能によつて食はうとするから食へないので、自然に任して置いて必けば食へるといふことになります。

これはチヤンと玆に證明することが出來るのはこの地珠が初まつて以來、非常な年數が

經つて居りまして、其の地球上に生活して居つた人類は、非常な數であります。その多數の人類が、みな相當の生活をして、一代を終つて來て居ります。これが何よりの證據であります。

又、お互が生れた時には、確かに裸體で生れたばかりではない、食ふものを用意して生れたのでもありません。若しそれ一生涯食へるだけのものを用意して生れたとするならば食ふ心配はないかも知れませんが、夫は事實出來ない事になつて居ります。

子供の生れる度毎に、其の子供が一生食へるだけの物を積んで置いたならば、地球上はまるで食物だらけで、歩く事も何も出來なくなつてしまふ。殊に、さういふ長い間の食物の用意をして置くやうなことは、實際に於て、出來ないばかりでなく、全く其の必要はない。そんな事をしなくても、年々新らしい食物を與へて下さるやうに、天の組織が出來て居ります。

又、十年も二十年もの食物を用意して、積んで置けないやうにチヤンと出來て居る、即

ち、腐つて了ふ事になる、是は、そんな必要はないぞといふ天の啓示であらうと思ひます。

夫でありますから、一生涯食へるだけの物を積んで置くことは、無論出來もせず、必要もない。其の代り、年々新らしい物を造つて下さるのです、夫れをとつて食つて、ズツと昔から今日に至るまで、皆やつて來て居ります。

吾々が生れた時には、今日まで食へる食物は積んではなかつたけれども、お互ひはどうか斯うか食うて來て居ります。

又、吾々の先祖、多數の人數が、どうか、斯うか食つて居たといふことから考へますとこの經驗から推して、將來も、必らず食ふ物に差支へないものであるといふことを、斷定して間違ひはありません。

然るに、目の前にチャンと用意をして置かなければ、心配だといふ人があるなれば、それは餘り杞憂ではなからうかと思ひます。

人間の生活に必要の物は、食物ばかりではない、最も必要なのは空氣である、若し、こ

の空氣がなくなつてしまつては大變だといつて、心配しても、よさゝうに思はれます。

すべては天の攝理

然るに、昔から今日まで、多數の人が居りますが、空氣がなくなつたら大變だといつて心配した人はない。何故、是は心配しないかといふと、空氣は何時でも存在して居るといふことを、習慣上、無意識に覺えて居るから、それで心配しないのだらうと思ひます。

又、太陽は東の方から昇つて來る、さうして、西の方へ入る、是は人が生れ落ちてから今日まで少しも間違つたことがない。吾々時代ばかりではない。永久に太陽は東の方からチャンと昇つて來るといふことを確信して居るから、少しも心配しない。これと同じやうに、過去數千萬年の經驗から見て、食物も永久に存在して居るといふことを信じて、差支へないのである。隨つて、空氣がなくなつては、大變だといふ心配の必要がないのと同じ

やうに、食ふに困るといふ食物に付いての心配をする必要はないと思ひます。

但し、空氣は自然に口へ入つて參りますが、食物は默つて居つたんでは入つて來ない。來ないけれども、取るべき道具をチヤンと神樣がつけて居られる。即ち、何所かしらに食物が作らへてありますから、汝の眼を以てよく見、さうして手足を以て運んで、とつて來いと敎へてありますから、この手足さへ充分に使つて參りますれば、決して食ひはぐりといふものはありません。

是は人間ばかりではない。總ての動物に於きましても、食ひはぐるといふことは、昔から聞いたことはありません。

空飛ぶ鳥も多數ありますが、腹が減つて落たといふ例もありません。又、獸類にしましても、腹が減つて、其邊に倒れて居るやうなものもないのです。

何うか斯うか、皆生活をして居る。その點から矢張り、人間もチヤンと用意してなくても、何うか斯うか、一生涯を送ることは、今までの經驗から出來ることゝ信じてしまつて

間違ひはないと思ひます。

一體、吾々は、勝手に生れて來たものではないので、神樣がどういふ御都合かして、吾々を此の世の中に生れさせて下すつたのでありますから、苟しくも、吾々を此の世の中に生ぜしめた以上、吾々の一代は、どうか斯うか、食へる物をチヤンと用意なすつておいでになるといふことは、これは信じてちつとも間違のないことゝ思ひます。

吾々は、たとへば、口を持つて居る、この口の中へは、何物をか入れるやうに、チヤンと出來上つて居るべき筈ですから、口がある以上は、この口の中へ入るべき物が、チヤンと造らへられてあるといふことを、信じて間違ひはないと思ひます。

又、吾々には、呼吸する機關が備はつて居ります。總ての動物にも備はつて居る。呼吸の機關がある以上、空氣は確かに存在して居る筈であります。

呼吸機關があるのに、空氣がないといふやうな片手落の造り方は、神樣は決してなさらないのであります。

神様の經倫と申しませうか、却々巧妙至極で、我々の知識で想像だも及ばないやうに出來上つて居ります。

それでありますから、お互ひの智惠によつて、生活しやうとかいふやうな考へを、一切やめてしまつて、我々を神様が、一切おつくりなすつたのであるから、神様にお任せ申してしまつた方が、安心であると思ふ。所謂、安心立命の基は、結局、其の邊に落付くのであらうと思ひます。

食ひ方には方法がある

其所で、この食ひはぐりは如何なる場合にもないものであるが、食ひ方には上中下があります。是は努力の仕方、手足の使ひ方などで、違つて來るので、これを澤山に使ふ人は立派な生活が出來ます。

又、少しばかり使つてゐる人は、貧しい生活しか出來ないといふことになります。努力の大小によつて、生活に高低があります。

其所で、一番の苦痛は食へなくなるといふ問題でありますが、假に食へなくなることはないにしても、今日の生活程度を、下げなければならぬといふやうなことは、是は有りがちのことで、しかも却々の苦痛であります。

其所で、現在の生活程度を、如何なる場合にも下げないやうに、如何なる場合にも下げずして、やつてゆかれるやうに、常に工夫を凝す事が肝腎であります。

ところが、人には種々の不幸もある。災難もある。自分では、そんなことはないと思ひましても、どういふ都合かで、たとへば、月給取なら、職業に放れるといふこともありませう、商人なら失敗するといふこともありませう。

假にお互ひが、自分に少しも惡いことがなくても、先方の都合で、職に放れることは、これは無いとは限りません。有勝のことでありますから、その場合に陷つた時に、恐ら

く、泰然自若として、平氣で居るやうな人は、誠に少ないことと、私は甚だ遺憾に考へます。

假に、ズッと普通に勤めてゐたが、如何なる譯か、突然職に放れたとしまして、其の人は恐らく青い顏をして、家へ歸るでせう。家へ歸つても、默つて火鉢の前に腕でも拱んで、心配顏をして居るのが普通であります。

妻君が心配して、『どうかなすつたんですか』と訊いても却々言はないで、一人で溜息を吐いてるといふやうなことが隨分あると思ひます。

マア、段々と聞かれた結果、實は自分に惡いことも何もないけれども、銀行の都合とか會社の都合で今度罷めることになつたといふやうな話でもして御覽なさい。女は、殊に氣が小さいのでありますから、非常に心配して、恐らく、其の晩は寢ないで心配するといふのが、普通であらうと思ひます。

それで今、罷めたら直ぐに食ふに困るのではないが、併し、マア多少の積金もある、慰勞金もあるから、直ぐに困る事はないけれども、そんな物は忽ち失なつてしまひます。

つまり、例へば、玆に三千圓金があるとします。三千圓預けて利息を五分として、年百五十圓しか入らない、今まで千圓の生計をして居つたのが、百五十圓では到底も生計されない。困つたもんだ。三千圓では、却々食つて行かれないといつて、大騒ぎをやつて、夜も眠ずに騒ぐといふのが普通の狀態であります。

兎に角、是は生活程度をウンと急に下げなければならぬ。學校にやつて置いた子供を、急に退げなければならない。今まで下女も使つて居たのも、急にやめてしまはなければならない。今まで二十圓の家賃に住んで居つたが、こんなところに居ちや不可ない、裏長屋へ入らなければならぬといふやうな譯で、今までの生活を、いろ〳〵と急激に縮少するものが、若しあるとしたならば、夫は大きな考へ違ひだといふことを、私は言はねばならぬと思ひます。

さういふやうに慌てゝ、今までの生活程度を、急に下げるやうなことをすると、『彼の男は職業に放れたもんだから、夫で食へなくなつたと見えて、急に裏長屋に引込ん

だ。彼の男が來たら、金でも借に來るかも知れない、來たら居ないといつて留守を使へ』

といふやうなことになる、今まで親しくして居た友達までも遠ざかる。又、子供が學校へ行つても、お前の家は商賣がなくなつたら、大變小さい所へ引込んだねといはれる、又、今まで取付けの米屋からは、彼の人は商賣に放れたから、是からは現金でなければ賣らないなんといふことになる、さうすると、四方八方ふさがつてしまつて、益々、悲觀せざるを得ないことになります。

さうして、何か得るところがあるかといふと、少しも得るところはない。さういふ場合に、どうしたらよいかといふのが、實に問題であります。併し、從來、正直に眞面目に働いて居つたとすれば、多少の貯蓄も出來て居りませう。慰勞金も必らずあるに違ひないけれども、その慰勞金といふものや、積立金を合併しましても、一生其の利息で食つて行ける程、澤山にあるわけではないから、如何にも心配だといふて、所謂、悲觀するのです。

ところが、先程申しましたやうに、一生涯食ふことの出來るものを、玆に準備して置く

といふことが、全體の人に出來ないと同じやうに、誰でもが金の利息だけで、一生涯遊んで食へるといふやうなことは出來ないやうになつてゐます。若し、みなが夫だけの金を持つて居るとすると、金の價値がなくなります。

さうなると、銀行で預かつても利息はつけない、寧ろ、保管料を出して貰はなければならぬといふことになつてしまひます。それですから、皆が利息によつて、食ふことは出來ぬやうになつて居るといふて宜しい。

又、一面から考へますと、人間は働いて食ふべく神樣がこしらへてある、一生涯遊んで食へるやうにはしてありません。年々穀物や、すべてのものを新らしくこしらへて下さるから、夫を取つて食つて行けばよいやうに出來て居ります。

夫を一生涯何にもしないで金の働らきで食つて行くやうなことは、こりや天意に背いた方法だと思つて居ります。さういふやうな人が多くなると、其所で所謂社會主義、共產主義といふものが起つて來て、あれは、その金の力によつて食つて居るのだから、その金を

とつて、皆なの頭に分けてしまふといふことになります。

以前新聞で見ましたが、ロシアでは、つまり金のない勞働階級の人が、金を持つて居る階級の人を七萬人、或島へ流して、食物も何もやらないで、嬲殺にしてしまふといふ報道が出て居りました。實に恐ろしいことであります。

つまり、貧富の懸隔が甚しくなると、そんなやうな問題も、必ず出て參ります。

夫でありますから、貴下方が、一生涯遊んで食へる金を持ちたいといふ御希望があつては是はお爲にならぬからお止しなつた方がよろしい。併しながら、全然なくても困る、少なくも三年位の用意は何人にも必要であると思ひます。

其所で、日本の國民全體が、三年の用意をしなければならない。夫はどうすればよいかといふと、ニコ〳〵貯金によつて、金を貯めさへすれば宜いといふ、即ち、私がニコ〳〵貯金を大いに鼓吹する所以であります。

貯金の必要

先づ、考へまするに、少くとも三年位食ふて行けるだけの用意金を造つて置くことが何人にも必要で、夫以上はなくてもよろしいのです。三年の用意さへありますれば、現在の生活程度を、如何なる場合に於ても、下げなくても可いといふことを斷言いたします。

夫はどういふ方法でやるか、其の方法に就ては後から説明致しますから茲では省略します。この方法を以てすれば、萬一にも職業に放れた時でも、決して慌てゝ、要らない苦勞をしたり、馴れない事に手を出すには及ばない。何所までも吾々は金の力によつて、生活しやうとしないで、吾人に與へられたる手脚を働らかして、生活するといふ考へを忘れてはならぬと思ひます。

金の用意といふものは、暫らくの間のつなぎに必要であるにすぎません。あとは此の働きによつて生活するといふ途を取るより外はない。元來、努力と金と相俟つて、初めて安

心の生活を得られるものであります。ただ、努力にのみよつて生活しようとすると、職業に放れた時に直ぐに困ります。取つたものを、皆使つて了つて何等の用意もないといふのは、よろしくないが又、金だけの力によつて、一生涯遊んで暮らさうといふのは最も悪い話で、天意に背いたことゝ存じます。如何に丈夫な身體でも、毎日寢て居て御覽なさい。今度はホントの病氣になつて起きやうとしても起きられなくなります。

天が手脚を吾人に附與してあるにも拘らず、夫を少しも使はなければ、要らぬものなら能力を取つてしまへといつて、取られてしまふのです。

それでありますから、どうしても日々刻々、身に付いた凡ての能力を利用する、活用するといふことが必要であります。

日々怠らず、一生懸念に正直に手足を働らかして、其日々々を愉快に暮らしてさへ居れば、即ち、食ひはぐりといふ事は決してありません。

戰爭と金の力

國力と金力

今でも、殘念に思ひますのは、日清戰爭の結果であります。

戰ひには勝ちましても、多少の償金は、とりましても、一旦、馬關條約によつて日本の掌中に入るべき筈の遼東半島を還附しなければならなかつたといふことは、今日、なほわれ〳〵が忘れないところであります。

折角、血と肉とを投じて、さうして獲たる遼東半島を、しかも、相手の支那で、日本に讓渡するといふ條約を結びながら、他の國の壓迫によりまして、再び返さねばならぬといふことは、この上もなき恥辱、この上もなき無念と、國民は感じたのであります。

遼東半島を、日本に讓渡するといふことは、東洋の平和を害するから、そんなことをしては、よくあるまい、返したらよからう、もし、還さなければ、われ〳〵三國は同盟して

大いに、なすところがあるぞといつて、脅かしたのであります。

しかし、その當時、日本は、この三國を相手にして、戰ふといふことは、國力が許しませんから、涙を呑んで、東洋の平和のためとあるならば、致方がない、それを返還するといふことになつたのであります。

しかるに、日本に返還を迫つた三國は、どうしたかと申しますと、ロシアは、旅順口をとり、獨逸は、遠慮なく、膠洲灣をとつたのであります。

日本が遼東半島をとることが、東洋の平和のために、よくないならば、他の國がこれをとるといふことも、等しく平和のために、よくないはづでありますが、惜哉、それを言ふだけの力がなかつたのであります。

たゞ兵力が強いといふだけでは、結局の勝利を得るといふことは、出來ません。

戰ひは、結局、金力の爭ひになるのであります。その當時の日本の力と、外國の力とを比較してどの位ゐの違ひがあつたかと申しますと、ほとんど、お話しになりません。

この銀行が生れた當時の全國の各銀行の總預金を調べて見ますと、五億に足りません。しかも、政府の郵便貯金が、僅かに二千萬圓に達して居なかつた。日本の人口は當時五千萬でありました。五億の金を、五千萬人で割て見ますと、一人前十圓にしかついて居りません。萬一の用意金として、十圓では、安心が出來ませうか。

それらの點から考へましても、日本の國力は實に低かつたといふことになります。

それから、次に起つた歐洲戰爭で見ますと、どこの國でも、數百億圓の戰費を使つて居ります。

しかるに、日本の總體の銀行預金が僅かに五億、しかも、郵便貯金が全國で、二千萬といふやうな微弱なことでは、いくら齒軋りをしても、外國と戰ひをするといふことは、その當時では、到底、出來ぬことであつたのであります。

そこで、恨みをのんで、遼東半島を還附すると同時に、他日、必ずこの恨みを返さなければならぬといふことは、その當時の國民が、深く〳〵、腦裡に刻み込んだことでありま

す。

今日の新聞には、餘り見かけませんが、臥薪嘗膽といふ文字が、日々〳〵新聞紙上に掲載されたのであります。その當時でありますから、私の密かに考へますところでは、どうしても國を強からしめるには、國を富ますことにあるのですから、國を富ます途を講ずることが一番大切であり、立派な仕事であると私は考へたのであります。

當時、私は二十七歳の弱輩でありましたが、一生を、一つ國を富ます事業に投じて見たいものであるといふ考へをもつたのが、即ち、この銀行の起る原因であります。

非常時に備へる用意

今申上げましたやうに、國と國とが戰をするには、まづ金力を充分にして置かなければならぬといふことは、勿論であります。どうしても、國を富ますといふことが、先決問題

であります。また、各人の生活狀態の上から見ましても、金が一番大切であります。

いくら商賣が盛んでも、衰へるといふことがあります。また、いくら丈夫でありましても、不幸にして、病氣になるといふこともあります。さういふ萬一の時の用意を、各人がして置かないといふことは、この上もなき不覺、この上もなき不安心であります。

年老ひたる人、幼きものを抱えて居ります主人公といたしましては、なほさら、萬一に備へて置くといふことが、最も必要なことであるかのやうに、私は考へるのであります。

そこで、國家の上からも、金をつくることは、必要でありますが、各人の上からいたしましても、わづか一人あて十圓位の用意金しかないやうでは、まことに不安心極まりないからして、少くも、千圓以上の用意金をつくるといふことは、何人にとつても、必要であると、私は考へたのであります。

さて、日本人が、必ず一人について千圓づゝの用意金を積立てるといたしますと、どの位の金額になるかといふと、一人が十圓づゝの用意金を積んだとして、今日では七億圓で

ありますから、百圓づゝ積んで、七十億圓、千圓づゝ積みますと即ち七百億圓といふ大金になります。

その金があつたならば、各人は、生活上に安心を得られるし、國家は、また、萬一の場合に應ずることが出來るのであります。どうしても、その位の金は、つくらなければならぬのであります。

どうすれば金が出來るか

さて、その金をつくるには、如何いたしたらよろしいか、その當時、行はれて居りました貯金の方法では、金は容易にたまるものではないから、どうしてもこれは一つの異なつた方法を案出いたしまして、一生懸命で、その方法によつて、ためなければ、金はたまるものではないと考へたのであります。

そこで、當時五千萬人といつても、その内に老若男女の別がありますが、一軒の主人公といふものは、少くとも、四五人の家族を養つて居りますから、戸數で見ますと、少くとも一千萬戸であります。一千萬戸の主人公が、こゝに、百圓づゝの用意金をつくるといたしますと、直ちに十億圓といふ金が集まります。

百圓といふ金を、三年間につくるといたします。所謂、三年貯金の百圓取りを皆がいたしますと、ちようど、三年目には十億といふ金が出來ます。一千圓づゝ三年貯金を初めると、三年を出でずして百億圓といふ貯金が出來ます。

どうしても、是は氣を揃へて、一生懸命で、所謂、石の上にも三年の辛抱で、毎月一定の金額を積立てるといふことをしないと、金は容易にたまるものではないといふやうに、考へまして、この銀行はそれを專門にして、貯金の奬勵を初めたのであります。

爾來、四十年間、皆樣の御同情を得まして、現に、五億圓以上に達して居ります。

これは、この銀行だけのことですが、かういふ方法が、普く行きわたつて、たくさん行

はれるといふことでありますと、五億圓は十億圓になり、十億圓は、百億圓になるといふ時代も、決して、むづかしいことではないのであります。

さういふ時代が來なければ、國家も、各人も、所謂、安心といふことは、決して出來ないのであります。

そこで、先程十億とか百億とか、いふことを申しましたから、五億圓といふ金は、極小さなものゝやうに、嚮くかも知れませんが、これを試みに一圓紙幣で積上げて御覽になると、そんなにも大きなものかといふ、驚ろきの眼で、その積上げられた五億圓を御覽になるだらうと思ひます。

一圓紙幣を百枚重ねますと、四分の厚さになります。千枚で四寸、一萬圓で四尺でありますから、五億圓と申しますと、二十萬尺の高さになります。二十萬尺と申しますと、どの位の高さになりませうか。富士山の高さが、ちやうど、一萬二千尺でございますから、二十萬尺といふと、富士山を十七重ねた位の高さになるのであります。

預金者方の御丹精で、今日、富士山を十七重ねただけ、一圓紙幣を、積み上げたのに相違ありません。これは、實に立派な成績だと、私は深く感服して居るのであります。

ことに、私は、いろ〳〵統計をとつて居りますが、いま此銀行の預金者の全體が、七十萬人に達して居ります。この七十萬人のお方が年末であらうが、どんな不景氣な時であらうが、米が高くならうが、少しも遲滯なく、毎月きち〳〵と積み立てられる、その割合がちやんと一定して居ります。

即ち、千人の中で、毎月きちんと御拂込みなさるお方が、いつも九百七十人であります。僅かに後れるお方が、たつた三十人であります。その後れた方は、旅行の場合などの都合で後れるので、歸つておいでになりますと、すぐにお拂込みになります。

かういふ立派な成績は、決して、他に類のないことで、たとへ如何なる政府が、稅金を徵收いたしますにしても、かうは行くまいと思ひます。

金を作るコツ

そこで、この貯金をして居る方が、實に正直に、克明に御商賣を御勉強なすつて居ればこそ、きち〳〵と御掛込が出來るものと考へます。

かういふお方に對しては、何とか便利に御融通の方法はないものかと考へまして先年ニコ〳〵貸金といふ對人信用の貸付を初めました。

この貸付が如何なる月でも、新規貸出しが、五百萬圓に下ることはありません。現在、その方の貸付に出て居る總金額が、一億三千八百萬圓以上に達して居ります。さうして、この方の件數が、二十五萬口以上になつてゐるのであります。

これは全國に銀行も多くありますが、貸付の件數が、二十五萬口以上といふのは、殆んど他に類がありません。

まして、對人信用の貸付が、一億二千八百萬圓に達したといふことは、容易に、外國にも類を見ることが出來ないやうに考へて居ります。

しかも、その成績は、今申しますやうに、千人の中で、僅か三十人、いろ〳〵の事情のため、掛け遲れるといふに過ぎません。これを見ても如何に堅實で如何に立派な融通方法であり、放資方法であるかといふことを證明いたすことが出來ます。

さういふわけでありますから、こゝに、お預りいたしました五億圓餘の金は、預金者の御丹精で、積上げられた大切なお金でありますから、私等も命懸けで、どんなことがあつても、御損耗をかけぬ覺悟をもつて、確實に保管して居ります。

それで、こゝにお預けになつた金額は、出來るだけ、皆さま方にお使ひ下さるやうな方針をとつて居りますから、この銀行は、預金者方の銀行であるといふお考へを持つて頂きたいのであります。

また、金を貯めるには、貯め方があると思ひます。常に愉快な心をもつて、ニコ〳〵と

貯めるのでなければ、金は決して貯りません。よし貯つても、その金で預金者が幸福になるといふことは、ないと信じて居ります。

たとへば、無理なことをする、人を困らして貯める、さういふ金は、ニコ〳〵貯金ではないのであります。貯まれば貯まるほど、皆様が幸福を得るやうな金でなければ、ニコ〳〵貯金ではないのであります。

金を貯めると、そこに、いろ〳〵の副産物が生じてまゐります。第一、貯金をすれば身體が丈夫になります。何故丈夫になるかといふと、ぼんやりしてゐたのでは、貯金は、つゞけて行くことが出來ません、どうしても、貯金をつゞけるには、一生懸命で働かなければなりません。手足を動かすならば、益々〳〵、丈夫になりますから、貯金をすれば、身體が丈夫になるといふのであります。

それから、貯金をすると、家庭が圓滿になります。つまり、家中、一生懸命に勉強すればこそ、はじめて貯金が出來るのですから、貯金が出來て行く家庭は、必ず、圓滿な家庭

だといふことが出來ます。

また、第三には、貯金すると、商賣が必らず繁昌いたします。商賣が繁昌しなければ、貯金は續けて行かれないからであります。

この銀行に貯金をつゞけてゐる人は、第一に金が出來ること、第二に身體が丈夫になること、第三に家庭が圓滿であること、第四に商賣が繁昌すること、これ以上に何か望むならば、それは、望む方が無理ではなからうかと思ひます。

神様にお願ひいたしましても、商賣が繁昌して、身體が丈夫で、金が出來て、家庭が圓滿で、これ以上のことは恐らくないだらうと思ひます。

ちやうど、かういふ言葉があります。『抜苦與樂』即ち、苦を抜き、樂を與へるといふ神様を念ずるものは、苦を抜いてやるぞ、樂を與へてやるぞといふ意味であります。神様にお願しなくても、貯金さへすれば、必ず、苦は除かれ、樂を得るわけであります。

さういふわけでありますから、この貯金は、どうしても大いに廣める必要がありまして

國家の富を增すといふ、今日の非常時には、最も必要なことであると思ひます。

私の事業哲學

九つの苦心

私が銀行經營に就ての苦心は、過去四十年間、やつて參つたので、なか〳〵一朝一夕でお話しは出來ませんが、此程、某社から、『現代名士出世苦心號』といふ雜誌を發行するから、今までに何か苦心した事があつたならば、簡單に書いて貰ひたいといふ事を端書で照會して參りました。依て、簡單に要領だけを次のやうに書いて送りました。

一、私の苦心した要點は、

（一）事業を單純化すること

（二）事業を合理的に經營すること

（三）他の誘惑を排して一事業に專念すること

（四）事業に關係なき方面との交渉はつとめて避けること

（五）従業員一同を家族と見て溫情的に取扱ふこと
（六）力めて階級的思想を排し、給仕小使を呼ぶにも必ず『さん』づけにすること
（七）従業員の待遇は必ず他より一段割をよくすること
（八）ニコ〳〵主義をモットーとして一同和熟業務に精勵すること
（九）正直が最後の勝利なりと信じて不動の大精神で熱心努力すること

二、右を實地に行ふに就ては中々の苦心でありましたが、今日あるを致したのは全く天祐によるのであります。

と斯ういふのであります。ソコで九つの苦心について、聊さか説明して見たいと思ひます。

事業を單純化す

先づ、第一の事業を單純化すること。

これは何でもないやうでありますが、仕事といふものは、單純にしなければいけない。複雜にしてはいけない事を私は常に信じて居ります。

夫ですから、本行では手形の割引も致しません。有價證券其他の擔保貸付をもやらない極單純に致して居つたのが非常によかつたといふ事を、ツク〳〵今日思ひ當るのであります。

若し普通銀行のやうに、手形の割引や、有價證券擔保で貸して居つたならば、その痛手を今日負つて、容易に起つ事の出來ぬハメに陷つてゐはしなかつたかと思ひます。

預金が多くなれば多くなる程、皆、さういふ方面に貸出されて居りますから、回收する事が出來ぬやうになつて居りはしなかつたかと思ひます。

然るに、仕事をごく單純にやつて居りましたために、即ち仕事を單純化する事に注意して居つたために、今日、それが勝利を得た唯一の原因になつたと思ひます。

たとへば、貯金の種類にいたしましても、一年、二年、三年、五年といふやうにやつて居るところもありますが、此方は三年一つであります。そのために、手數と費用とが省けることは、餘程違つて居りはしないかと思ひます。

さういふやうなことで、この仕事を最も單純化するといふことを、第一に念頭に置いてやつて來たのであります。これは何でもない事でありますが、實行するには、なか〳〵苦心であります。

合理的に經營する

それから、次に事業を合理的に經營する事。

之が亦何でもないことのやうで、なか〳〵難かしいことで、つまり合理的、ソロバンに合ふやうに經營すること。これは口にはいへますが、なか〳〵實行することは容易ならぬ

問題であります。

理窟といふものは、どうにでもつけられるもので、たとへば、或人に金を貸してやらうと思へば、貸してやるやうな理窟をつけて貸します。

監督嚴重なる特殊銀行あたりが、みんな理窟があつて貸した、然るに、結果はどうかといふと、皆さんも御記憶のやうに、あゝいふやうな狀態になつて居ります。

要するに、本當の正しき途を踏んで、而してソロバンに合ふのでなければ、一切やらぬといふ合理的の營業方法をとるといふことが、實際に於ては、なか〳〵難かしいのであります。

たとへば、今、金を預かつても、いくら巧妙に運用しても平均七分以上には廻りません。平均を見るとさういふことが分つて居りますのに、たとへば、百萬圓を七分に預かつてくれろといはるゝ場合、ソロバンに合はないでも預かるのが、今日の普通であります。

ソロバンに合はないから、そんなものは預かれないといつてお斷りをする、これは、な

か〳〵出來ないことであります。

此程も或人から、七十萬圓程七分で預かつて貰ひたいといふて來ましたが、私は直ぐお斷りをしました。これは何でもないことであつて、なか〳〵他では出來ぬ事です。

つまり、預かることは、ソロバンに合ふ合はぬぢやない、どういふ必要か知らぬが、たゞ金を集めるといふのが主になつて居るやうで、私共はさういふやり方をすれば、必らず失敗するといふことを確信して居りますから、ソロバンに合ふことでなければ、いくら金額が多くても、いくら欲しくても、斷乎としてお斷りをするといつたやうなやり方を、ズツと昔からやつて居りますから、茲に屑が出來なかつたのであります。

たとへば、掛金の割合を安くすると、一時は體裁がよろしいが、結局お客さんに御迷惑をかけることになります、私共がこの商賣をやつて居るのは、お客さんに御迷惑をかけるのが目的ではない、否、お客さんのおためになるやうに、又、銀行も立ち行くやうに、いろ〳〵考へて見ますと、どうしても、さういふソロバンが出ません。ソロバンが出ない以

上、斷乎として、お斷りしなければなりません。

いくら他で、さういふ割合でやるところがありましても、その眞似をすることは出來ない、といふことを、この銀行は昔から守つて來て居ります。之が合理的經營方法であると思ひます。

他でも、計算が合ふからやつてゐるのだといふかも知れぬが、私共のやうな、安全第一に經營するとなると、ソロバン上では、どうしても本行の割合が一番穩當のやうで、さうでないと、どうも何處かに無理が出ます。

たとへば、相當利益を擧げなければならぬから、チツト位ひ危險なものにでも、金を貸す、その結果は、實に恐るべきことになります。

私共、ソロバン上、どうしてもさう成り行くものであるといふことを、深く信じて居りますから、此方のソロバンに合ふやうにして、それでいけなければ、どうも已むを得ない、といふやり方をして居ります。

併し、お蔭で却つて、それが多くの預金を集めることになつて、今日に至つて居ることは、誠に幸ひといはなければなりません。

又、一面から考へますと、これによつて世間が非常な利益を得て居ることであらうと思ひます。若し本行がソロバンに合はぬ不合理なことで、是だけの預金を吸集して居つたならば、多くの人が、いつかは一度苦しみを見るやうなことになるのであります。

でありますから、合理的の經營方法をとるといふことは、口では簡單ですが、之は餘程正義の念に富んで居ることゝ、又、斷行するといふ勇氣があるのでなければ、なか〳〵守つて行けない事であります。

之を守るといふことについては、過去二十五年間、隨分少からぬ苦心もいたしたのであります。いろ〳〵と割合をよくしてくれろといふことを、行員からいはれたこともありましたけれども、ソロバンに合はぬから、ズツと此儘で來たといふ譯で、合理的に經營することは、實に容易ならぬ問題であります。

一事業に專念する

それから次には、他の誘惑を斥ぞけて、一事業に專念すること。

これはマア何でもないやうな事でありますが、この銀行に目鼻がついて、段々形が大きくなつて參りますと、いろ〳〵誘惑をもつて迎へられることになります。

私共が世間並のやり方をいたして居りますと、夫こそ、肩書を二十も三十もつけることは易いことであります。彼方此方の大株主になつて、さういふ會社を動かすことも譯のないことであります。

併しながら、さういふことは、ヤハリ銀行のために決して良いことではありません。銀行の一事業に專念するといふことが、銀行のために一番よいことであると思ひますから、專念此銀行に從事して居ります。之は何でもないやうで、實際は難かしいことであります。

なか〳〵之は苦心を要する、いろ〳〵の誘惑を斥けるといふことは實際に於て難かしいのであります。

其他のこと

夫から次は、事業に關係なき方面との交渉は、力めて避けること。

これは、從來、極嚴格に守つて來ましたやうな譯であります。

それから從業員一同を家族と見て、溫情的に取扱ふこと。これも力めてやつて來たつもりであります。それからして、力めて階級思想を排し、給仕小使を呼ぶにも必らず『さん』づけにすること。給仕にしても段々大きくなつて參ります。大きくなつても、元呼びつけにして居つたといふ習慣があると、なか〳〵直らぬものであります。

それでありますから、『さん』づけにするといふことを規則にして居ります。

夫から從業員の待遇は、必らず他より一段割をよくするといふことも、ズツと心掛けて來て居ります。

次に、ニコ〳〵主義をモットーとして、一同和熟業務に精勵して行く事。

夫から正直が最後の勝利なりと信じて、不動の大精神で熱心努力すること。之は私モウ一點も疑ひないと思つて居ります。

一時は損のやうに見えましても、正しき道を踏んで行くことが一番利益のやうに思ひまして、利害損得といふやうな點から考へず、正しいか正しくないかといふことを第一の標準として、進んで行くのが、最後の勝利で、出來るだけさういふやうな主義でやつて來て居るのであります。

幸ひにして、今日あるを得ましたことは、誠に慶賀に堪えない次第であります。

猶、將來も斯ういふ流儀で、何所までも進んで行き、益々、此銀行を立派なものに仕上げて行かなければならぬと考へて居ります。

私の銀行經營に於ける信念

金の力と貯金の必要

わが不動貯金銀行の設立は、明治三十三年の九月で、その目的は、全く一種の据置貯金法を全國に普及せしめんためでありました。

丁度、その頃、井上さんや、松方さんが、頻りに、勤儉貯蓄を鼓吹して、全國を遊説せられ、一般の民衆も、また、貯蓄の必要を感ずるやうになつた當時のことであります。

なるほど、貯金の勸誘は、至極結構である、必要である。殊に、生存競爭の激しい今の世の中は、友人も親戚も、頼りになるものでない。悲運のときに、同情を寄せてくれるものが幾人ありませうか。この場合、唯一の同情者となつて、慰安を與へ、急を救つてくれるものは、金であります。

しかしながら、愚考によれば、いくら貯金が必要だからとて、また、その必要を認めた

からとて『貯金の機關とその方法』とが完備せされば、なか〳〵、實行の出來るものでもなければ、永續の出來るものでもありません。

從つて、折角の勸誘も、所謂、骨折損の草臥儲けで、案外、効果が尠いのであります。

もつとも、一時は、その說に感奮して、貯金をはじめるとしても、すぐにいやになるのは邦人の常で、永續などは思ひもよらぬ話しであります。

由來、日本人は、歐米人に比して、何事にも辛棒が足りない。これは、食物の關係もあらうが、要するに、熱し易く冷め易いのが邦人の通弊であります。

かういふ國民を相手に貯金の奬勵は、普通の遣り方では、到底駄目である。そこで、一度預けたら、必ず豫定の期限までは決して出さない、また、出せないといふ覺悟の貯金法を、强制的に實行せしむるに限ると思つて、こゝに本行の特色たる『石の上にも三年貯金』といふのを案出したのであります。

その上、集金制度を設けて、預金者の心の緊を緩めさせないやう、油斷なく往訪集金し

て、貯蓄熱の冷めないやうにしたのであります。

即ち、この三年貯金と集金制度が、兩々相俟つて、はじめて、眞の貯金が出來るのであります。

國家國民を金持にする仕事

不動貯金銀行が、創立當初より、やつてゐる仕事は、勤儉貯蓄の鼓吹實行であります。

國家國民のために、よいことであると信じて、やつて居るのであります。

これは、それほど人が氣にしてゐないところを話して、說得して、そして、貯蓄をさせるといふことにして居るのであります。

集めた金は、銀行の金ではない、お客さんの金で、こゝに、もし、十億圓の金が集まつて來れば、それは、不動貯金銀行の者が努力した結果、お客樣が、それだけの金持になつ

たといふことになります。

多勢の人を、金持にしたといふことは、いかに愉快でありませうか、この位、善い仕事はないやうに思つて居ります。

多勢の人が金持になるならば、從つて、そこの家庭は豐かになる、所謂、貧乏といふやうなものが、なくなつてしまふことになります。

つまり、貧乏人をなくして、金持ばかり造るといふやうな役目を、お互ひはして居るのですから、一方から見れば、恰度、福の神みたやうなもので、大黒様の生れ變り位のものであります。富をつくることを敎へ、富をひろめ、富を造らせるやうに、お互ひは努力して居ります。

だから、どこまでも、大黒様に成り代つて、實地に人を善化させる、敎導する、そして金持にさせる、家庭の圓滿をはかつてやる、商賣繁昌するやうに、導いてやるといふやうな考へをもつて、日々お客様に接してゐるわけであります。大黒様を崇拜するのも、さ

ういふ意味合で、崇拜するわけであります。

今日一日、貴下に成り代つて、多勢の人を富ませるといふことに力めますから、大黒様にあやかるやうに、私共の身體も丈夫になり、そして、ニコ〳〵して、お客様に接することの出來るやうにといふ意味合で、大黒様を拜んでゐます。

そして、自分の兄弟の家へ行つたつもりで、門並にニコ〳〵と一つ入り込んで、そして貯金の必要も說き、いろ〳〵と說法して、敎導するといふことは、社會の上から見ましても、非常な利益で、一面から見れば、一つの宗敎家といふことにもなります。

大衆のための銀行

一體、こゝの貯金者は、中層もしくは中層以下が多いのであります。上流の人も、かなりありますが、無論、統計をとつて見れば、中流以下が多い、またさういふ方面にお華客

を廣めるといふことが、此の銀行の方針であります。

妙なもので、鐵道に乘るお客でも、一等、二等あたりに乘るお客と、三等に乘るお客とは、人數が大變違ひます。それで、一等の賃銀は高くとつても、結局、算盤に合はぬといふ話で、一番利益は、矢張り三等のお客であるさうであります。

今日、多くの銀行は、中層以上の人から金を預かつてゐる。しかるに、郵便貯金の如き、實に零碎な金が二十七億圓以上に達して居ります。これを見ても、零碎な貯金を度外視することは出來ない、むしろ、零碎な方が、大きくなるのであらうと思ひます。

ビールの販路の如きも、ビール會社の支配人に聞いた話でありますが、『上等の料理屋や、待合に、ビールを使つて貰はうとするには、運動費も、なか〳〵かゝる、そして、使つて貰ふことになつて、そのビールをどの位飲んで貰へるかといふと、存外ビールの量が少ないから、上流方面に、信用を得たところで、そのビールの販賣は知れたものである。從つて利益が少ない、それよりは、何でもガブ〳〵飲むむやうな銘酒屋、もしくは下等の

料理屋方面に澤山使つて貰ふ方が、大變分量が餘計出て利益である。そして、また、それをひろめることも、なし易い、それですから、何も上流方面に飲んで貰はなくてもよい。中層以下が、立派な大切なお華客である』といふやうなことを聞きましたが、恰度、銀行がそれと同じやうなものであらうと思ひます。

どこまでも、中層以下を標準として、熱心、確實な營業をするといふことが、一番預金が多いやうに思ひます。

而して、中層以下の方面たるや、預ける機關は備はつてをりますが、金を使ふ方の機關は少しも備はつてをりません。まづ、預けるには郵便貯金がある、また普通の銀行の預金もありませうが、いざ金を貸して貰ふといふことになると、所謂、一六銀行しかないといふ狀態であります。

それから、他の銀行に於ては、中層以下で貯めた金は、みな中流以上の商賣擴張に使はれてゐる、早くいへば、中流以下の人が、みな中流以上の人の商賣擴張に使はれてし

まつてゐる、中流以下の人は、商賣擴張の金が少しもない、だから、所謂、上の方は銀行を利用して、商賣の擴張も出來るが、下の方になると、それが出來ないことになる、すると、所謂、貧富の懸隔が、ます〳〵甚だしくなりはしないかと思ふのであります。

そこで、庶民銀行といふやうな議論も出て來る、所謂、中層以下の人に金を使はせるやうな組織が必要だといふやうな問題も、出て來るわけであります。

即ち、私共は、中層もしくは、その以下から、貯金を吸收して來るのですから、その貯金者自身に金を使つて貰ふ、そして、商賣の擴張に利用して貰ひたい、そして、商賣の擴張の結果、貯金する餘裕が出來たら、貯金をして貰ふ、また、それを商賣の擴張に使つて貰ふといふやうにしたならば、大變、商賣の奬勵にもなりはしないかと思ひます。

さういふ所から、ニコ〳〵貸金の方法を案出いたしました。それで、辛棒して、或る期間も遲滯なく貯金を掛け續けるといふ人は、たしかに、試驗に及第した人でありますから、その人は、何時でも、これ〳〵までの金はお使ひ下さいと、使ふだけの權利を附與するやうなもので、はじめて、使ふ權利を得るわけで、大變、商賣人にとつては、便利ではないかと思ひます。

何事も因果應報

この宇宙間、何事も原因なくして、結果のあるものはありません。

善因あるものには、善果を與へる、惡因あるものには、惡果を與へる、所謂、因果應報は、微妙に行はれて居ると、深く信ずると同時に、恐れて居るのであります。

一體、みな空々漠々として、無茶苦茶に、その日その日を送つてをりますが、考へて見たら、實に、不思議千萬なものであらうと思ひます。

例へば、太陽は、何億萬年の昔から、光りを放つて、あんな空中にぶら下つてゐる、また、この地球は急速力をもつて、いつも一つの軌道を廻つてゐる、また夜になつてみると

月と星が無數に空に輝いて居るのを見るのであります。

あの星から地球へ來る光が、何萬年間を要するといふ位、遠いところにあるのださうであります。そして、それは、非常に大きなものださうであります。

さういふ、大きなものが、算へきれぬほど、澤山にあるので、宇宙は、それほど大きなものであります。

そんなに大きなものだといふことは、人は、それほどに感じてをりません。なんとなれば、馴れてをりますから。けれども、考へて見れば、實に恐ろしいほど大きなものであります。

また、小さい物といへば、湯呑の中にある水の中には、無數の顯微鏡で漸く見るやうな小さな虫が澤山にゐる、また、その虫の中を割つて、度の強い顯微鏡で見たならば、その中にも、うぢや〳〵と澤山に一層小さい虫がゐるかも知れない、それが、みな機能を備へて、飛んだり、跳ねたりしてゐるといふことであります。

小さいことは、飽までも小さい、大きなものは、どこまでも大きい、それほど、宇宙は大きな物であります。

さういふやうな物が、偶然に出來るはづは、決してないので、これらを支配してゐる神といふやうなものが、必ず存在してゐるといふことを認めるのが、當然であります。認めずして、有耶無耶に暮してゐるのが、實に間違つたことであらうと、私は深く考へます。

一體、こゝに家屋があるとすれば、この家屋は、誰が造らへたか、必らず造らへた人が昔か今か、あるに違ひない、これは、間違のない推測であらうと思ひます。

いま、こゝに家屋があるけれど、造らへた人が現在ゐないから、造へたのではない、偶然に、こゝの家屋が出來たのだらうといふやうな人は、これは子供の智慧で、大人としてそんな馬鹿なことをいふことは、出來るものではありません。

こゝに、家屋がある以上、家屋を造つたものが、嘗て存在して居つたといふことは言へる、また言ふのが當然であります。

それと同じやうに、人間、その他の森羅萬象が出來てゐる、しかも、整然たる一つの規律の下に、ちやんと存在してゐるといふことを考へたならば、必らず、それを造つたものがなければならぬといふことも、當然の推測であらうと思ひます。

それを、人はみな見ないものですから、推測しません。

この人間を造つたものを、眼のあたり見ないから、そんなことは考へないのであります。とんでもない心得違ひだと思ひます。

お互ひに、偶然に生れて來たのではない、父母が產んだのだといふかも知れぬが、父母が別に生まうとして產んだのではない、また父母が、目や、鼻や、手足を、こしらへたのではない。神が、さういふやうに、自然に、こしらへられるやうに人間を造つたのであります。

さうするところに、神の存在を認めなければならぬことになります。

僅かばかりの學問をなした者が、やれ科學だとか、理學だとか、そんな理窟をいふてを

りますが、人間僅か五十年、その五十年の間に、宇宙の萬象、しかも數億萬年以上經過してゐて、眼で見ることの出來ない、想像も出來ないところの大なるもの、小なるもの、すべてのことを、僅か五十年間位、棲息してゐる人間が、學問の力のみで解釋するといふことは、この上もない烏滸がましい希望であらうと思ひます。

到底、想像も解釋も出來たものではありません。

兎に角、我々を產んだものは、假に父母であるとしても、その父母を產んだものは、祖父母であるとしても、ずつと、その祖先は、誰か產んだものがなければ、到底生きて來られるものではない、してみると、最初造つたものがあるに違ひない、どうしても、これはわれ〳〵の眼では見ることが出來ませんが、宇宙に、さういふ偉大なる力を有つてゐる神樣が、昔も今も、存在して居るのではないかと想像するのは當然のことであります。

その神樣の存在を知るのは、實に仕合せで、神の存在を知ると同時に、すべての因果應報が、神の力によつて、よく行はれてゐることを、承知しなければならぬことになつてゐ

ます。

人の心と神

人の心と神様とは、たしかに連鎖があるといふことは、否定することが出來ません。それですから、神様に向つて、拜むといふことは、たしかに、その心が神様に通じて、それだけの効驗が現はれるのだらうと思ひます。

神様に向つて、禮拜するといふやうなことは、少しばかり學問をした人は、迷信だとかなんだとか、惡口を言ひますが、豈圖らんや、さういふ關係があるとすれば、神様を拜むといふことは、立派な道理が出て參ります。また、たしかに、効驗が現はれて來るだらうと思ひます。

そこで、『お互ひの心といふものは、自分のものである』といふ考へを去つてしまはな

ければなりません。また、自分の心に思つたことは、たゞちに、神様が御承知であるといふことを知らなければなりません。

人が見てゐないから、惡いことをする、誤魔化しをする、人が見てゐないから、誰にも分りはしないだらうと思ふのは、實に淺慮なことで、ちやんと神様は、それを御承知である、御承知であると同時に、その報ひを、必ず神様が與へる、その微妙な關係を、深く承知してゐなければなりません。

飲みたいといふ一時の慾を制しきれずに、酒を飲んだ、その飲んだといふことは、甚だ不都合なことであるから、神様は、その人間の財政狀態を苦しめるばかりではない、信用を落させるばかりでもない、その小供に罪を及ぼして、子供を弱くするといふやうな、實に恐るべき結果を神様がお與へになつて居ります。

これは、譬に申すのではありません。さういふ律が、ちやんと行はれてゐることを、私は確信してをりますから、申すのであります。實に、恐るべきことと言はなければなりま

せん。

だから、惡念邪念といふものが、自分の心に起ると同時に、その起つたといふことを、神様がすぐ、御承知になる、行ひに現はさないでも、『此奴は甚だ不都合であるぞ』といつて、それだけの罰をお與へになります。

よく『あの人は、かういふ惡いことをしてゐるにもかゝはらず、捕まらないで、相當に暮してゐる、うまくやつてゐる』などといふやうな人が、隨分世間にありますが、これは神様といふものを、盲目にでもした後に、いふべき言葉で、そんな理窟は、決して、行はれてゐるはづはありません。

罪業の借金は早く返せ

法律といふものは、何のために設けてあるか、法律の制裁と、神様の制裁とは別で、法

律は、たゞ、一つの團體の中に、規律といふものを設けないと、勝手氣儘なことをして困るから、それで、一つの規則を設けて、その規則に反くと、かういふ處罰を與へるぞといふことを、きめて、それを行つてゐるに過ぎないのです。

だから、その所業が國體の規則にふれた時に、法律は罰してゐるが、精神上の罪惡は、少しも法律は罰して居りません。

ところが、神様の方は、そんな大ざつぱなものではありません。行ひの惡いも罰するが、心の中に思つたことだけでも罰するのであります。

そこで、惡いことをした人が、法律の網をのがれてゐると、『定めし彼奴は愉快だらう、巧くやつてゐる』と、かういふ風に、思ふ人がありますが、それは、飛んでもない考へ違ひであります。

試みに、その人の身になつて見ると、よくあるさうですが、むしろ、早く捕まつて、牢舍に入つた方が安心である、重荷をおろしたやうな心になつて、今度出たら、青天白日の

身で、正しい行ひをしようといふ考へになるさうであります。しかし、その捕まるまでの心配といふものは、實に、大へんなものださうであります。それがために、少しも、落着がない、戸籍調べに來た巡査を見ても、びく〳〵するといふほどださうであります。そして、夜も、ろく〳〵寢ることが出來ないといふことであります。

良心の苛責で、惡いことをした、とんだことをしたといふ良心の責めといふもので、牢舍へ入つた以上の苦しみを受けるのであります。

だから、人が捕まらないで、彼奴は、うまくやつてゐる、などといふてゐるのは、とんでもないことで、反對に、捕まらぬ期間が、長ければ長いほど、その人間の苦しみはひどいのであります。

昔、佐倉宗五郎といふ人が、百姓の總代になつて、領主の堀田家に訴たへて出た。それを不都合な奴であるといふので、捕へて、どういふ處罰を與へたがよいかといふので、役人が協議をした。その時に、殺てししまつては、少しも苦しめることにならぬから、牢舍

を別に造つて、こゝには宗五郎を入れ、その隣りには、子供等を入れる、その隣りには女房を入れる、さうして、子供が、父母のところへ行きたいといふて、泣くのを見せて苦しませる。また阿母さんの乳が張つて、飲ましてやりたいと思つても、子供と一緒の牢へ入れない、かくの如くして、宗五郎夫婦を苦しめて、最後に殺してしまつたら、よからうといふものがありまして、成程それは面白からうといふので、永い間、牢舍の中で、慘酷な責め方をしたさうであります。

むしろ、早く殺されてしまつた方が、宗五郎のためには樂であつたのでありませう。それと同じやうなもので、早く捕まつた人は、罪が輕いので、罪が輕いほど早く捕まるのであります。罪の重いのは、永く捕まらせずに置いて、神がぎゆう〳〵責めてゐるのであります。

私の知つて居る者が、某會社を、めちやくちやにしてしまつた、今日、其人間を訴へても、別に金が取れるわけでもないから、株主からも訴へないで、却つて、訴へたりなんか

すると、いけないからといふので、許されてゐる人間がありますが、その人間が、仕合せかどうかといふと、決して、仕合せではありません。

最早、さういふ狀態になつてから、殆んど、四五年になりませう。その間、年中問題が出て來る、さうして、議論が出ると、告訴するといふ問題も出て來るからして、家におちゝしてゐられない、さういふ問題が起る毎度に、各株主を訪問して泣付いて、どうか一つ許して貰ひたいといふて、願下げにして貰ふといふやうな譯で、今日になつて居るのであります。

そんなことで、年中、おど〳〵してをりますから、自分が、後の仕事に取掛ることも出來ない、從つて生活は、だん〳〵苦しくなる、實に、悲慘の境遇で、さうして、自分は惡いことをしたといふ念慮が、自分を責めて、責めぬいて居りますから、身體は、だん〳〵弱つてしまつて、それほどの年齡でもないのに、頭髮は眞白になつて、その苦しみたるやとても言葉に述べ難いほどであるさうであります。

私は、その者に向つて、『なぜ、早く自分から進んで監獄へ行かないのか、さうして自分が惡うございましたといつて、今後、悛めて、新生涯を送つた方がよいのではないか』といふけれども、矢張り、思ひ切りが惡くて、たゞ、その日〳〵を送つてゐるのであります。

だから、實に、悲慘な境遇で、絕えず、不安の念に襲はれて、びく〳〵してゐる、これが、即ち、神の重い罰であらうと思ひます。

それですから、『彼奴は、うまくやつてゐる』などと表面からは、さう見えませうが、本人になつて見ると、なか〳〵そんなものではありません。それがために、どの位、命を縮めるか知れないのであります。

例へば、七十まで生きる人が、五十か、六十で、死んでしまはなければならぬやうなことになつてをります。

牢舍へ入つた以上に、心を苦しめるのでありますから、免れてゐるのよりも、むしろ、

捕まる方がよいといふても、少しも差支へありません。

神様の罰は、實に、微妙に行はれてゐるのであります。

今日、不幸災難が、お互ひに湧いて來る、自分達が、悪いことをしないにもかゝはらず、さういふやうな災難が、湧いて來たとするならば、それは、自分の過去の罪業か、或は前世に於ける所業の結果か、もしくは、祖先の罪から、自分の代になつて、現はれて來たのに違ひないのであります。

それだから、さういふ借金があるならば、早く拂つてしまふ方が、安心であります。長く置けば、置くほど、利に利が積つて、借金が殖えて參りますから、もう自分の過去に於て犯した罪か、もしくは、自分の前世に犯した罪か、もしくは、自分の祖先の犯した罪のために、思ひがけない不幸災難が、生じて來たものであるから、さういふやうな不幸災難が、生じて來たときには、早く借金返しが出來るといふて、むしろ、喜ぶべき筈だらうと思ひます。

『かういふ不幸が出來て困ります。かういふ災難が出來て困ります』といつてゐる人がありますが、これは、飛んでもない心得違ひで、むしろ、借金返しが出來るといふて喜ぶべきものであつて、また、さういふ風に、一つ諦めをつけるといふことが肝腎で、さうして過去の罪業は、出來るだけ早く帳消しにして貰ふといふやうにしなければなりません。

自分が犯した罪なら致し方がない、たゞ、早く帳消しにしてしまふよりほかに、致し方がない、もし、自分が現在犯してゐるならば、自分から進んで帳消しになるやうに、所謂悔ひ悛めなければなりません。

悔ひ悛めよ

耶蘇の『悔ひ悛めよ』といふ語は、最も、よい語であつて、悔ひ悛めると同時に、その人は、生涯善道に向ふ覺悟をしなければなりません。

悔ひ悛めるといふのは、善に遷る第一で、今までの行ひを悛めて、善い道を履まなければなりません。

それをやらないでゐるから、その罪は、だん〳〵大きくなつて、終には、背負ひきれないほどの罪惡になつてしまふ、自分が、背負ふばかりではない、自分の子孫にまで及ぼすといふことになります。

さういふやうに、因果應報といふものは、實に、微妙に行はれてゐることを、深く知らなければなりません。さうして、神の存在といふことを承知せねばなりません。心に惡念が起つてすらも、神は、それだけの罰を與へるに違ひない、たとへば、心に惡念が起ると顏が、所謂、惡相になる、顏に惡相が現はれるのは、即ち、それだけ、異狀を與へたといふことになります。身體に異狀を與へたといふだけでも、その人の壽命に、何分かの影響をなしてゐるといふことになる、これも矢張り、一つの罰であります。

惡相の人に、發達するもの、成功するものは、決してありません。これも一つの、神の

罰であります。

また、心に思つたばかりではない、行ひに現はれたならば、神は、重くこれを罰するのであります。

だから、人間は、どうしても、正しい道を履んで行かなければなりません。

神が存在してゐると同時に、神の愛の、すべての支配をまぬがれることは、出來ない、神の網は、到底まぬがれることは出來ないといふことを、深く感ずると共に、いかに、われ〳〵は、なすべきかといへば、たゞ、正しい道を履んで、日々を暮らして行くといふことにしなければなりません。

正しい道は、どうして履んで行つたならばよいかといふと、これも、また問題になるがそれは、天が貴下方の心に、みな履むべき道を敎へてゐる。即ち、貴下方の良心といふものは、これは、善いことであるか、惡いことであるかを、判斷するだけの心を與へて居る、その心の命ずる通り、日々行つて行けば、それが、即ち、神の命令に服從して、行動

をしてゐるといふことになります。

神の所謂、御心に背かぬといふことになります。幸ひが來やうとも、不幸の來るわけはありません。みな、心に背いた行をするから、不幸、災難が續々と湧いて來るのであります。

それで、自分の心といふものは、神と確かに連鎖がある、たゞ今申す通り、自分の心はあちらへ行けといふのにかゝはらず、こつちへ行つた方が、早道だなどといつて、傍道へ入りますから、神の心に背いて、罰があたる。即ち、早道をとつたために、陷穽があつてそれに落ちるといふやうなことになつて、その人は酷い目に遭ふのであります。

恰度、正しい成績を現はして、さうして正しい賞與を得るのは、當然であるが、瞞着して成績をあげて、一時、賞にあづかるといふやうな、正しくない道をふんで行く、人は知るまいと思ふが、天は知つてをりますから、それだけの罰は、すぐに、この人間に與へられることは、少しも疑ふ餘地がありません。

神の心に從へ

それでありますから、何でも、かんでも、日々正しい道を、お互ひにふんで行くといふことを、私は私の銀行の特色として行きたいと念じて居ります。

我が銀行に從事してゐるものが、みな感心に人格が、よくなるといふことにしたい、さうすると、お互ひに天が、それだけの報ひを與へて下さるのであります。

良心の命令に服從して、自分の心に善いと思ふたことは、利害を放れてやつて行く、この道さへ行けば、正しいのであるといふて、進んで行くことにしたいと思つて居ります。

さうすれば、必ずよい結果を神が與へて下さる、卑怯未練な道は、決してとるものではない、卑怯だとか、未練だとか、善くないなどといふのは、神の心に背いてゐるので、神は、善い道をふんで行けといふて、心を與へてゐるのであります。

心の命ずる通りに、ふんで行くといふことが、人間世に處する最善の道であります。

それから、正しい道をふんで行くには、心の命令に服從して行くのである、それが、即ち、神の命令だといふことを深く信ずると共に、神の與へた總ての道具を、最極度に利用することを忘れてはなりません。神は無意味に、いろ〳〵の道具を與へては居りません。

我々には、眼といふものがあり、鼻があり、口があり、手足があり、頭がある。これは何のために與へたのであるか、眼は、よく物を見るために與へられたのですから、それを十分に使用しないで疎漏なことをすると、いろ〳〵な間違ひが起る。即ち、神の御心に背いたことになるのであります。つまり、神の與へた總ての道具を利用しないと、それだけの罰を與へる、よく利用した人は、好い報ひを得るのであります。

天の與へた道具を活用せよ

實に不思議なもので、手足でも、眼でも、頭でも、すべて、よく働かせれば、ます〳〵冴えて來る、役に立つて來る、反對に使はないと、だん〳〵、役立たなくなる、さういふ能力を、天が漸次とつてしまふからであります。『此奴手足をつけて置いても、十分に使つてゐないから、能力をとつてしまへ』といつて、たとへば、一寸病氣で寢てゐて、起きるやうになつても、手足が、すぐに思ふやうに動かない、それと同じやうなもので、横着をして居る人の手足は、その能力を神が少くしてしまふ、終には、全然とつてしまふかも知れぬ。だからして、天の與へた總ての道具は、出來るだけ、よく使ふことが必要であります。

つまり、天の與へた口を、最極度に使用して、人を說けば、十分の結果をこゝに得られる、それを横着して、まあ面倒だから、七分位にして置かうといふと、七分だけしか結果を現はすことが出來ない、また、彼所まで歩いて行くも面倒だからといつて、途中で、いい加減なことで、止まつてしまふやうなことをすると、矢張り、それだけの結果しか、現

はれて來ないといふことになります。

一體、手足は、何のために神が與へて居るか、つまり、それを使用して、生活の道を立てるといふために與へてゐる、その手足を十分に使ふ人が、勝利者となるので、その手足を十分に使はぬ人が、みな失敗すると定まつてをります。

これらも、因果應報の一つの理法を放れてをりません。

さういふやうになつてをりますから、この不動貯金に從事して居る人は、正しい心の命令に、日々服從して、天の與へた道具を、すべて最極度に使用して、よく活動するといふことをもつて、この銀行の特色として、他の同業者の眞似ることの出來ない方面にまで、絶えず發展したいと思ふて居ります。

正しい道をふんで行くことと、天の與へた總ての道具を、最極度に利用すること、神の存在の因果應報の律が、頗る微妙に行はれて居るといふことを、よく諒解して、十分活動をしてゐるところに、わが不動貯金銀行の特色があり、それがまた大方針でもあります。

中流階級と金融の道

中流階級救濟のため

不動貯金銀行のことに就いて、いさゝか、お話しをして見たいと思ひます。

この銀行には、一種の特色があります。この特色が或る一面からいふと、即ち、本行の天職ともなり、使命ともなります。

そこで、先づ第一に、この銀行の使命ともいふべきものは、何であるかといふと、中流階級を、大きくいへば、救濟するといふのが、この銀行の使命と申しませうか、天職と申しませうか、從つて、それより生ずる特色が、こゝに現はれて來ます。

なぜ、この中流階級の救濟を以て、この銀行が自任するかといふと、世間に銀行も多數あるが、さういふ目的を以て、働きつゝある銀行は、他に類がありません。

この程も、或人が來て、

『實に、勞働階級は誠に憐れなものである、その勞働階級を救はんがために、勞働協會といふものをこしらへるから、その方の會計監督になつて貰へまいか』

といふことを言つて來た人があります。その時、私は答へて申しますのに、

『それは至極結構なことです。しかしながら、勞働階級方面のことにたづさはるのは、自ら他に人がありませうが、私は、むしろ、この中流階級を救濟するといふことが、焦眉の急ではあるまいかと思ひます。それゆゑに、その方面に、働くのを以て、私の仕事と思つて居りますから、遺憾ながら、勞働階級方面までには、手を出すだけの餘裕がありません』

とお答へして置きました。これを要するに、今日第一の缺陷と申しますのは、中流階級が、日に月に、年にだん〳〵と衰へて行くかの如き狀態を現はして居ることであります。このまゝに打捨てゝ置くならば、十年、二十年の後には、どういふ現象を現はすであらうか、といふことは、識者の大いに考へなければならぬことと思ひます。

まづ第一に、產業方面から、お話し申し上げると、今日の、この生產事業に從事して居るものは、第一に資金を要する、その資金を充分に、しかも、低利に使用し得るものが、結局、勝利者となります。

それでありますから、金持のやる仕事は、ます〳〵繁昌して行きますが、金の無い人のやる仕事はいくら知識があつても、いくら勉强しても、到底、それで競爭して、打克つといふことは出來ません。今日は、何事も競爭の時代でありますから、競爭に打克つのでなければ、到底、發達するわけに行くものではありません。

たとへば、東京市內に於いても、大規模でやつて居る商店は、ドン〳〵盛んになつて行くが、小規模の、所謂、中流階級の、俗に小商人といふか、さういふ方面は、どういふ狀態であるかといふと、年を逐うて、衰微して行きはしないかと思ひます。

例へば、三越呉服店……名前は呉服店でありますが、今日では何でも扱かつて居ります。所謂、百貨を扱つて居ります。食料品でも、靴でも、下駄でも、傘でも、何でも扱つて居

ります。今までは、例へば鰹節を買ふ時には、『ニンベン』へ注文して買つたものでも、今日は、三越へ電話をかければ、便利に持つて來て呉れる、傘を買ふにしても、また、下駄を買ふにしても、これまでは、それ〴〵專門の家について買つたものですが、今日では何んでも、かんでも、三越で買ふことが出來ますから、大變便利で、自然と三越へ行くことになります。

それと競爭して、他の商人がやつて行くといふことは、餘程、困難なことではなからうかと思ひます。

殊に、例へば、鰹節屋にしましても、海苔屋にしましても、昔から鰹節は何處、海苔は何處と、各々特色を持つて、商賣が繁昌して來た店が、今日の時勢で、だん〴〵推移して行くならば、どういふ結果になるかといふと、漸次、三越といふやうなデパートメント・ストアアに、お客樣を吸集されてしまふやうなことになりはしないだらうか。商品切手を人に贈るにしても、また、貰ふにしても、例へば、ニンベンの鰹節切手を持つてゐても、

鰹節の必要の時だけしか使へない、しかるに、三越の鰹節の切手を貰へば、下駄も買へる、傘も買へるといふわけで、貰つた方は、大へん便利であります。從つて、贈る人も、同じ切手を贈るにしても、三越の切手を贈つた方が喜ばれるといふことになつて、三越にさういふ注文が、だん〴〵と殖えて行くだらうと思ひます。

これは、三越の方では、殆んど無利息の預金見たやうなものですから、さういふ商品切手が多數出ると、利息の出ない金が澤山集まるわけですから、これを以て、充分安く仕入れることが出來て、ます〴〵大きくなるといふことになります。また、その澤山の金を以て、たとへば、機業地へ行つて、此處で出來るものは、全部俺の方へよこせといふやうなことで、安く仕入れることが出來ます。さうして、買つて來たものを、安く賣出しますから、到底、小資本の商人が競爭しても、打勝てるものではありません。

それと、交通の便利からも、さういふ傾向が出て來ます。昔は、山の手方面の商人は、その附近の人を對手に商賣をして居りましたが、現在のお客は、下町へ行つて、三越あた

りで買ひます。電車賃は、均一でありますから、少し時間を費せば、三越で何でも買へるわけであります。だから、山の手の商店はだん〳〵寂れるといふことになります。

例へば、嫁入仕度を買ふにしても、三越へ行けば、何でも便利に整つてしまふ、しかるに、こゝ、かしこへ行つて、いろ〳〵集めることになると、時間もかゝり、費用もかゝつて、つまらないといふので、なんでも、かんでも、大きいところへ、だん〳〵集まつてしまふ、行つて見ると分りますが、三越は、非常に繁昌して居ります。今後も、ます〳〵繁昌するでせう。かくの如くデパートの繁昌を見ても、普通の商店が、それだけ寂れて行くといふことが分ります。

たゞ、大きい店が繁昌して居るのを以て、非常に盛んだといふことだけを考へずに、さういふ半面には、多數の商人がだんだん衰退に傾きつゝあるといふことを、識者は、認めなければならぬと思ひます。

これは、商人ばかりではありません。農家にしても、大農、中農、小農に、わけると、

中農は、年々減びて行つて、大農か小農かゞ、だん〳〵殖えて行きます。何年かの後には、大きな百姓か、小さな百姓かの、二つに別れてしまふ傾きをもつて居ります。

商人の方は、先程申しました通り、大きな商人か、小さな商人かゞ殘つて、中流階級の商人といふものはだん〳〵無くなつてしまふ傾向であります。

勞資の對立はいけない

また今日、各方面の株式會社の株主名簿を見ても分ります。大きいものは、だん〳〵餘計に株を集めて、大株主になります、中途半端の株主は、だん〳〵減つて行く傾きがあります。

これを見ても、貧富の懸隔は、日に月に、甚だしくなつて行くことが分ります。これは急には參りますまいが、五年經ち十年經ち二十年經つて見ましたならば、恐ろしい妙な社

會狀態がこゝに現はれて來はしないかと思ひます。

大體、競爭の世の中でありますから、多數の資本を持つて、しかも、低利資本を持つてさうして手びろく營業するものと、僅かに自分の資力だけで、若くは、高利の金を借りてやるのでは、到底、競爭は出來ません。ちやうど、大人と小兒の喧嘩のやうなもので、言はずして、小兒が負けることは、分つて居ります。

このまゝに打捨てて置けば、中流の商人といふものは、だん〳〵と衰退してしまふといふことは、決して間違つた觀察ではないのであります。

その結果は、どうなるかと申しますと、世の中は、貧富の二階級になつてしまふ、中流といふものが、全然、なくなつてしまふ、さういふ社會は、決して、健全なる社會とはいへません。

昔の露西亞の如き、最も好い例であります。つまり、上流階級といふ金持か、それから最下等の勞働者か、この二になつてしまつた、この二つになつた社會は、完全なる秩序ある

る社會といふことは出來ません。

何故かと申しますと、この中流階級は、所謂、知識階級であります。つまり、相當の教育を受けてゐる人達が、一番、中流階級に多いのであります。その中流階級に止まることが出來ずして、所謂、劣敗者となつて、勞働階級に陷つてしまつたのですから、勞働階級の人が交つてゐることになります。

だから、すべてが不平で堪らぬ。自分は中流階級に位置を占めて居つたのが、今日、勞働階級に陷つてしまつたのは、社會の組織が惡いのだといふので、だん〳〵議論が出てまゐりまして、やかましい勞働問題が、そこで初めて出てまゐります。

勞働者ばかりだつたならば、そんな問題は起つて參りませんが、知識ある中流階級に居つた人達が、勞働階級に陷つて來たから、不平で堪らぬ、從つて、彼の勞働者を煽動して、いろ〳〵なことを初めるといふことになります。それですから社會の秩序といふものは、到底、保つことは出來ぬことになつてしまひます。